

# 里野中山城跡、結城城跡、浦屋敷跡

－すさみ串本道路建設事業に伴う発掘調査報告書－

2024年2月

公益財団法人 和歌山県文化財センター



1. 里野中山城跡全景（北から）



2. 里野中山城跡・第1次調査全景（上空から）



## 序

里野中山城跡、結城城跡、浦屋敷跡は、和歌山県南部の枯木灘に面した狭小な平野部やその隣接丘陵に営まれた遺跡です。恵まれた入り江を持つこの地域は、古くから海上交通の要衝として、陸路においては熊野参詣道の大辺路が通過する地域として重きをなしてきたところです。

周辺地域の遺跡は少ないものの、近年、城跡の発見が相次ぎ、中世から近世初頭にかけて小平野単位で小領主が存在し、それぞれが城を築いていたことが明らかになってきました。

このたび、一般国道すさみ串本道路建設事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受けて里野中山城跡、結城城跡（第1次）の発掘調査を実施しました。また、和歌山県教育委員会による結城城跡（第2次）、浦屋敷跡の発掘調査も実施され、発掘調査事例が少ない和歌山県南部地域において、城の構造や城主の生活の一端を窺う資料を得ることができました。

ここに、これらの発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る上で一資料となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、発掘調査ならびに報告書作成に当たりご指導・ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げるとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いします。

令和6年2月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻井敏雄



## 例　　言

1. 本書は、西牟婁郡すさみ町里野に所在する里野中山城跡、東牟婁郡串本町有田上に所在する結城城跡、同町江田に所在する浦屋敷跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、一般国道 42 号すさみ串本道路建設事業に伴うもので、令和元年度に里野中山城跡（第 1 次）と結城城跡（第 1 次）、令和 2 年度に結城城跡（第 2 次）と浦屋敷跡、令和 3 年度里野中山城跡（第 2 次）発掘調査業務を実施し、令和 5 年度に報告書作成に伴う出土遺物等整理業務を実施した。
3. 発掘調査業務のうち、里野中山城跡（第 1・2 次）と結城城跡（第 1 次）の調査を公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、「文化財センター」という。）が、結城城跡（第 2 次）と浦屋敷跡の調査を和歌山県教育委員会（以下、「県教委」という。）が実施し、出土遺物等整理業務は、文化財センターが実施した。
4. 一連の業務は、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所（以下、「国土交通省」という。）の委託を受け、文化財センターが受託した業務については県教委の指導のもとに実施した。
5. 県教委が受託した発掘調査は、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、「県文化遺産課」という。）の仲辻慧大が担当した。文化財センターが実施した発掘調査業務・出土遺物等整理業務の調査組織は下記の通りである。

	【令和元年度】	【令和 3 年度】	【令和 5 年度】
事務局長	井上　舉広	平林　照浩	平林　照浩
埋蔵文化財課長	丹野　拓	高橋　智也	高橋　智也
発掘調査業務担当	田之上裕子	川崎　雅史	
出土遺物等整理業務担当			川崎　雅史

6. 本書の執筆のうち、文化財センター担当分について川崎が、県教委担当分について仲辻がおこない、編集は仲辻と協議のうえ川崎がおこなった。
7. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、それぞれの業務担当組織が、出土遺物は県教委が保管している。
8. 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務に際し、下記の方々や団体からご協力を得た。記して感謝を表します。

白石博則　野田理　水島大二　森村健一

## 凡　　例

1. 文化財センターが実施した発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006. 4）に準拠しておこなった。
2. 調査ならびに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（平成 14 年国土交通省告示第 9 号）第 VI 系であり、値 m 単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P. +）の数値である。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2018 年版）に準じ、土質は調査担当者の任意の判断でおこなっている。
4. 調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲する。遺構番号は種別に関わらず 1

からの通し番号で、また、遺物番号も種類等に関わらず1から通し番号を付している。

5. 調査で使用した調査コードは里野中山城跡（第1次）が19-41・012（2019年度—すさみ町・里野中山城跡）、里野中山城跡（第2次）が21-41・012（2021年度—すさみ町・里野中山城跡）、結城城跡（第1次）が19-42・022（2019年度—串本町・結城城跡）、結城城跡（第2次）が20-42・022（2020年度—串本町・結城城跡）、浦屋敷跡が20-42・025（2020年度—串本町・浦屋敷跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

## 本文目次

### 序・例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 里野中山城跡の発掘調査	2
第1節 環境	2
第2節 発掘調査までの経過	4
1. 第1次発掘調査	4
2. 第2次発掘調査	4
第3節 発掘調査の経過	4
1. 第1次発掘調査	4
2. 第2次発掘調査	6
第4節 調査の方法	6
1. 調査手順	6
2. 地区割	6
第5節 第1次発掘調査の成果	8
1. 基本層序	8
2. 検出した遺構	11
第6節 第2次発掘調査の成果	17
第7節 まとめ	19
第3章 結城城跡の第1次発掘調査	22
第1節 環境	22
第2節 発掘調査の経過	23
第3節 調査の方法	24
1. 調査の手順	24
2. 地区割	24
第4節 調査成果	26
1. 基本層序	26
2. 検出した遺構	26
第5節 まとめ	34
第4章 結城城跡の第2次発掘調査	37
第1節 調査に至る経緯	37
第2節 調査の方法	38
1. 調査の方法	38
2. 基本層序	38
第3節 調査の成果	39
1. 検出した遺構	39
2. 出土遺物	44
第4節 まとめ	46
第5章 浦屋敷跡の発掘調査	47
第1節 調査に至る経緯	47

第2節 遺跡周辺の環境	47
第3節 調査の方法	48
1. 調査の方法	48
2. 基本層序	49
第4節 発掘調査の成果	49
1. 検出した遺構	49
2. 出土遺物	54
第5節まとめ	56
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

### 里野中山城跡

図1 里野中山城跡の位置	2	図8 曲輪部断面土層図	12
図2 周辺の遺跡	2	図9 土堀断面土層図	13
図3 虎松山城跡縄張り図	3	図10 土坑	15
図4 調査区区割り図	5	図11 小穴	16
図5 地区割(大区画)	7	図12 出土遺物	18
図6 地区割(中区画)	7	図13 里野中山城跡縄張り図	19
図7 調査区全体図	9・10		

### 結城城跡第1次発掘調査

図14 結城城跡の位置	22	図20 調査区断面土層図	28
図15 周辺の遺跡	22	図21 1区土坑	29
図16 調査区区割り図	24	図22 2区井戸・石列	31
図17 地区割(大区画)	25	図23 3区埋桶・土坑	32
図18 地区割(中区画)	25	図24 出土遺物	33
図19 調査区全体図	27	図25 結城城跡縄張り図	34

### 結城城跡第2次発掘調査

図26 調査区の位置	37	図30 遺構断面図1	42
図27 調査区区割り図	38	図31 遺構断面図2	43
図28 第1遺構平面図	40	図32 出土遺物	45
図29 第2遺構平面図及び壁面土層断面図	41		

### 浦屋敷跡

図33 遺跡の位置	47	図36 遺構断面図	53
図34 調査区の位置	49	図37 出土遺物	55
図35 遺構全体図・土層断面図	51・52		

## 写真目次

写真1 江住東(秋葉山)城跡	3	写真8 南西低丘陵部の石塔類	35
写真2 江住西城跡	3	写真9 有田神社	36
写真3 第1次調査 人力掘削作業	5	写真10 高石垣	48
写真4 第2次調査 航空写真撮影	8	写真11 調査風景	48
写真5 線路より南の平坦部に散乱する石塔類	19	写真12 西畠山西城跡 土堀	48
写真6 二部城跡	23	写真13 西畠山西城跡 堀切	48
写真7 結城城跡の堀切	35		

## 表目次

表1 業務工程表	1	表4 結城城跡第2次出土遺物観察表	46
表2 里野中山城跡出土遺物観察表	21	表5 浦屋敷跡出土遺物観察表	57
表3 結城城跡第1次出土遺物観察表	36		

## 図版目次

巻頭図版 1. 里野中山城跡全景（北から） 2. 里野中山城跡・第1次調査全景（上空から）

写真図版 1 里野中山城跡 調査区全景（上空から）

写真図版 2 里野中山城跡（第1次）

1. 4-2・5区曲輪部 調査前状況（南から）

2. 4-1区東斜面 調査前状況（東から）

3. 4-2・5区西斜面 調査前状況（北東から）

写真図版 3 里野中山城跡（第1次）

1. 曲輪部 完掘状況（上空から）

2. 西斜面調査区 完掘状況（西から）

3. 4-2区曲輪部 完掘状況（南西から）

写真図版 4 里野中山城跡（第1次）

1. 5区曲輪部 完掘状況（北西から）

2. 4-1区東斜面 完掘状況（東から）

3. 5区西斜面 完掘状況（北東から）

写真図版 5 里野中山城跡（第1次）

1. 4-2区曲輪部 北土壘（南から）

2. 4-2区曲輪部 北土壘断面（北西から）

3. 5区曲輪部 東土壘・502通路状遺構（北西から）

写真図版 6 里野中山城跡（第1次）

1. 5区曲輪部 東土壘断面（北から）

2. 5区曲輪部 南土壘と505溝（東から）

3. 5区曲輪部 西土壘の基底石（北から）

写真図版 7 里野中山城跡（第1次）

1. 4-2区曲輪部 409土坑発検出状況（北から）

2. 5区曲輪部 501土坑（北西から）

3. 5区曲輪部 505溝・小穴群2（北東から）

写真図版 8 里野中山城跡（第2次）

1. 調査前状況（南から）

2. 調査区全景（南から）

3. 石段・石垣（北西から）

写真図版 9 里野中山城跡 出土遺物

写真図版 10 結城城跡（第1次）

1. 結城城跡（南西から）

2. 調査前状況（南東から）

3. 1区 全景（西から）

写真図版 11 結城城跡（第1次）

1. 1区 調査区北壁断面（南から）

2. 1区 調査区西壁断面（東から）

3. 2区 全景（西から）

写真図版 12 結城城跡（第1次）

1. 2区 201井戸断面（北から）

2. 3区 全景（西から）

3. 3区 323小穴土器出土状況（西から）

写真図版 13 結城城跡（第1次）出土遺物

写真図版 14 結城城跡（第2次）

1. 調査前の状況（南東から）

2. 北区 遺構7検出状況（東から）

3. 北区 遺構17～20検出状況（西から）

4. 北区 遺構21～26検出状況（西から）

5. 北区 遺構7完掘状況（南から）

6. 北区 遺構17～20完掘状況（南から）

7. 北区 遺構33掘削状況（北から）

8. 北区 遺構33掘削状況（東から）

写真図版 15 結城城跡（第2次）

1. 北区 全景（東から）

2. 北区 西壁土層断面（東から）

3. 北区 北壁土層断面（南から）

4. 南区里道部 西側 遺構検出状況（西から）

5. 南区里道部 東側 遺構検出状況（東から）

写真図版 16 結城城跡（第2次）

1. 南区田圃部 遺構検出状況（東から）

2. 南区田圃部 遺構検出状況（南から）

3. 南区田圃部 遺構検出状況（西から）

4. 南区田圃部第1遺構面 掘削状況（東から）

5. 南区田圃部第2遺構面 遺構検出状況（西から）

6. 南区田圃部第2遺構面 南壁土層断面（北から）

7. 南区田圃部第2遺構面 完掘状況（東から）

8. 南区田圃部第2遺構面 完掘状況（南から）

写真図版 17 結城城跡（第2次）出土遺物

写真図版 18 浦屋敷跡

1. 掘削前の状況（南東から）

2. 第1遺構面 遺構検出状況（西から）

3. 第1遺構面 遺構9（南から）

写真図版 19 浦屋敷跡

1. 第1遺構面 遺構9（西から）

2. 第1遺構面 遺構10（西から）

3. 第1遺構面 遺構17（東から）

4. 第1遺構面 遺構16（北東から）

5. 第1遺構面 遺構11～14半裁断面（南から）

写真図版 20 浦屋敷跡

1. 第2遺構面 遺構6・7半裁断面（東から）

2. 第2遺構面 遺構7・8 遺物検出状況（南から）

3. 第2遺構面 遺構11半裁断面（南から）

4. 第2遺構面 遺構13半裁断面（南から）

5. 第2遺構面 遺構14半裁断面（南から）

6. 第2遺構面 遺構15・16半裁断面（南から）

7. 第2遺構面 遺構17・22半裁断面（南から）

8. 第2遺構面 遺構18半裁断面（南から）

写真図版 21 浦屋敷跡

1. 第2遺構面 完掘状況全景（西から）

2. 第2遺構面 北西側完掘状況及び断面（南東から）

3. 第2遺構面 南側完掘状況及び壁面（北から）

写真図版 22 浦屋敷跡 出土遺物（1）

写真図版 23 浦屋敷跡 出土遺物（2）

## 第1章 調査に至る経緯と経過

一般国道42号すさみ串本道路は、西牟婁郡すさみ町江住から東牟婁郡串本町サンゴ台に至る自動車専用道路で、大阪府から和歌山県南部地域を結ぶ既設の近畿自動車道紀勢線（田辺～すさみ）と接続し、その計画延長は19.2kmに及ぶ。

事業予定地の周辺には周知の埋蔵文化財包蔵地が複数含まれ、それらの埋蔵文化財包蔵地外においても遺構や遺物の発見される可能性が高いと判断された。これを受け、県文化遺産課が国土交通省との事前協議の上、平成28年度に事業予定地での分布調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の展開する可能性の高い範囲は、すさみ町の里野地区・仮称里野中山城跡、串本町の安指地区・遺物散布地・江田地区・仮称浦屋敷跡・田並地区・遺物散布地・有田地区・結城城跡・高富地区・遺物散布地の6地点であった。その後、串本町和深地区においても山城関連遺構が新たに確認されたことから、試掘確認調査の対象地点として追加された。以上のうち、仮称里野中山城跡については、曲輪・土塁などの遺構が確認されたことから、「里野中山城跡」として、また、高石垣や古井戸などが確認され、土器類などが採集された仮称浦屋敷跡については「浦屋敷跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地として新規認定された。

平成30年度から令和元年度にかけて、県文化遺産課によって上記の7地点において埋蔵文化財の展開の有無を確認するため試掘確認調査が実施され、里野中山城跡、結城城跡、浦屋敷跡において埋蔵文化財の展開が確認され、それらの遺跡を対象に本発掘調査が実施されることになった。

本発掘調査は、文化財センターが令和元年度に里野中山城跡と結城城跡（第1次）の調査を実施し、令和2年度に県教委によって結城城跡（第2次）と浦屋敷跡の調査が実施された。その後、里野中山城跡の発掘調査成果を踏まえ、調査区北隣接地で実施される工事用道路部分についても遺構の展開が予想されることから、当該部分の発掘調査を令和3年度に当文化財センターが実施した。これにより里野中山城跡の令和元年度の調査を第1次調査、令和3年度の調査を第2次調査とした。

一連の発掘調査成果を収録する報告書作成に伴う出土遺物等整理業務は、文化財センターが国土交通省の委託を受けて令和5年度に実施し、令和6年2月に発掘調査報告書を刊行した。

なお、調査の内容については遺跡別にし、結城城跡については第1次・第2次に分けて章立てをして記載する。

表1 業務工程表

	令和元年度（平成31年度）	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
里野中山城跡（第1次）	■		■		
里野中山城跡（第2次）			■		
結城城跡（第1次）	■				
結城城跡（第2次）		■	■		
浦屋敷跡					
出土遺物等整理業務					■

## 第2章 里野中山城跡の発掘調査

### 第1節 環境（図1・2）

里野中山城跡（12）は、和歌山県西牟婁郡すさみ町里野地内に所在し、串本町域にある高市山の南西斜面より源を発する里野西地川と小河地川に挟まれて南北に細長く伸びる標高約35m（比高約25m）の中山に位置する。二つの川は急峻な谷を下ることから普段は涸川で、河口部で合流して枯木灘に注ぐ。海岸部は小さな入り江となって狭小な砂浜が形成され、夏には里野海水浴場が営まれている。また、海岸に沿うように熊野参詣道の一つである大辺路が通過している。

集落は二つの川沿いと国道沿いの海岸段丘上に位置し、川沿いに八幡神社や臨濟宗妙心寺派正福寺がある。地域の産業は漁業と花卉栽培を中心とする農業である。

古代、里野付近は牟婁郡三崎郷に属し、近世においては和歌山藩領御蔵所・江田組に属するなど、串本地域との繋がりが強かったと考えられる。昭和34年に旧すさみ町と合併する以前は江庄村に属していた。

里野中山城跡（12）は調査前、雑木林や植林であったが、それ以前は段々畠として開墾されていた。また、頂上の曲輪部には祠が祀られていたこともあるて大木が生い茂っていた。

城跡は、「里野城屋敷」あるいは「中山城屋敷」と呼ばれ、伝承ではあるが城主は平安時代末期、伊豆国伊東の豪族



図1 里野中山城跡の位置

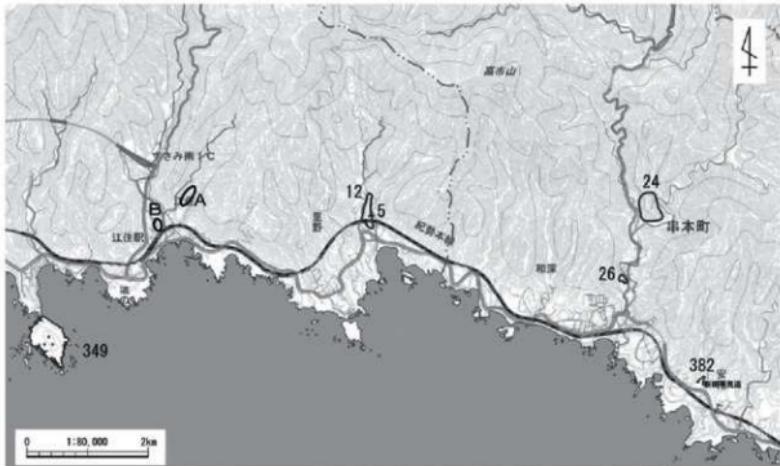


図2 周辺の遺跡



写真1 江住東(秋葉山)城跡



写真2 江住西城跡

であった伊東祐親の末裔が日向より移り住んだとされる。城跡の南西部には「土居」と呼ばれる土地があり、そこが伊東氏の屋敷跡であったとも言われている。

里野中山城跡周辺の遺跡は多くないが、里野石斧出土地（5）や江住東城跡（A）・江住西城跡（B）、虎松山城跡（24）、和深浦城跡（26）などがある。

里野石斧出土地は、里野中山城跡付近で弥生時代の石斧が出土したとされるが、出土の経緯や詳細は不明で、今回の一連の発掘調査でも弥生時代の遺物は出土していない。

江住東城跡（写真1）・江住西城跡（写真2）は、里野の西隣にあるすさみ町江住地区にあり、周知の遺跡ではなかったが、発掘調査の期間中に新たに確認された城である。江住東城跡は江住川左岸の山頂（通称秋葉山）に築かれた山城で、尾根上に配された複数の曲輪間に5本の堀切を開削している。堀切は一部で堅堀となって斜面を下り、平行する堅堀を掘削して畝状堅堀を形成する箇所が見られる。この城の据部にある城之平は、館に相応しい広い平坦部を有するが、畠の開墾等によって現状では館の遺構等は確認できない。一方、江住西城跡は、江住東城跡とは江住川を挟んだ位置の低丘陵に築かれた城である。現在は春日神社遙拝所となっているが、曲輪を囲む土塁の一部や堀切が確認でき、立地や構造から館と城を兼ねた館城に分類できる。江住は16世紀後半には周参見氏の影響下であったことが江住春日神社に遺る棟札から窺え、それ以前には城之平に城氏が住んでいたとの言い伝えもある。城氏については、先述の棟札にも名前が記されおり、二つの城は周参見氏や城氏に所縁があると捉えることができる。



図3 虎松山城跡縄張り図（作図：野田理）

虎松山城跡（図3）は串本町和深に所在し、和深川と鹿瀬根川の合流地点北側の丘陵端（標高110 m）に築かれている。『紀伊続風土記』などによれば、和深八幡神社の神主であった村上氏の居城とされている。縄張りは土星を巡らした二つの曲輪を中心に、連続堀切や畝状空堀群が配されており、小平野に築かれた城跡であるものの、比較的大規模な普請が行われている。また、和深浦城跡は虎松山城跡の下流にあり、丘陵端に築かれた小規模な曲輪と堀切2本で構成される。麓にある通称「御高屋敷」は、平時の居館とされる。

## 第2節 発掘調査までの経過

### 1. 第1次発掘調査

令和元年度に里野中山城跡及び結城城跡の西側橋脚設置部分及び町道付替部分について、他の発掘調査対象地に先行して調査が可能になった。里野中山城跡（第1次）と結城城跡（第1次）発掘調査は、国土交通省から平成31年4月15日付け国近整紀三工第25号及び平成31年4月26日付け国近整紀三工第51号で県教委に調査の依頼があり、県教委から平成31年4月26日付け文第04260005号で文化財センターに実施計画書の提出依頼があった。文化財センターは令和元年5月14日付け和文セ第78号で実施計画書を提出し、令和元年6月27日付けで国土交通省と文化財センターとで、「一般国道42号すさみ串本道路埋蔵文化財発掘調査業務」の委託契約を締結した。業務期間は令和元年6月28日から令和2年3月31日である。

里野中山城跡の調査面積は当初1681.8 m<sup>2</sup>であったが、途中、旧JR用地（110.15 m<sup>2</sup>）が追加されている。ただ、一部控除すべき範囲もあったことから最終的な調査面積は1745.9 m<sup>2</sup>となっている。

### 2. 第2次発掘調査

第2次発掘調査は、国土交通省から令和3年4月26日付け国近整紀三工第20号で県教委に調査の依頼があり、県教委から令和3年4月27日付け文第04260004号で文化財センターに実施計画書の提出依頼があった。文化財センターは令和3年5月24日付け和文セ第84号で実施計画書を提出し、令和3年8月18日付けで国土交通省と文化財センターとで、「一般国道42号すさみ串本道路建設事業に伴う里野中山城跡第2次発掘調査業務」の委託契約を締結した。業務期間は令和3年8月19日から令和4年1月31日で、調査面積は342.1 m<sup>2</sup>である。

## 第3節 発掘調査の経過（図4）

### 1. 第1次発掘調査

発掘調査工事は、結城城跡の調査とともに「すさみ串本道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査工事」として令和元年7月30日から翌年2月10日までの工期で、株式会社共栄建設工業に再委託した。里野中山城跡の現地調査は、結城城跡の発掘調査終了後の令和元年9月14日より準備をはじめ調査を開始した。調査の途中、旧JR用地が調査対象地として追加されたことに伴い、変更契約をおこない、令和2年2月21日まで工期を延長している。

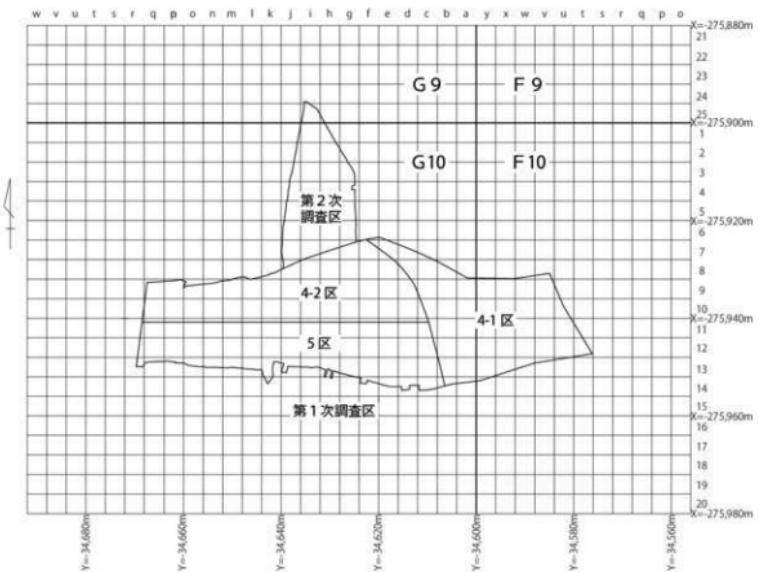


図4 調査区区割り図

航空撮影及び基準点測量は、「すさみ串本道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る航空写真撮影・基準点測量委託業務」として、三次元レーザ測量は、「すさみ串本道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る三次元レーザ測量業務委託」として、両業務とも令和元年7月30日から令和2年2月28日の契約期間で株式会社NAC総建に再委託した。航空写真測量撮影・基準点測量委託業務、三次元レーザ測量業務委託は発掘調査工事と同様の理由で変更契約を行い、令和2年3月13日まで契約期間を延長した。

調査区は先行して調査をおこなった結城城跡が1・2・3区したことから、里野中山城跡は4・5区としており、本報告でもそれを踏襲している。4・5区の分割は、排土置き場を確保するために前半・後半と2期に分けて調査したことによるもので、前半の調査区を4区・後半を5区として順次調査をおこなった。また、4区は東斜面を4-1区とし、



写真3 第1次調査 人力掘削作業

頂上部と西斜面については前半に調査した北半分を4-2区、後半に調査した南半分を5区としている。さらに頂上部から西斜面にかけては、近世以降の改変によって3段の平坦地となっていたことから、便宜上、頂部から平坦部ごとに北側を4-2a区、4-2b区、4-2c区、南側を5-a区、5-b区、5-c区としている。

各区とも表土から遺構面までは人力で掘削し、その後、遺構検出・掘削をおこない、写真撮影、実測図の作成等の記録資料作成をおこなった。

航空写真撮影は、第1回目が4-2区を対象に令和元年11月8日、第2回目が4-1区と4-2区の一部・5区を対象に令和2年1月31日に実施した。また、三次元レーザ測量は、第1回目が4-2区を対象に令和元年11月9日に、第2回目が4-1区と4-2区の一部・5区を対象に令和2年2月3日に実施した。

調査がおおよそ終了した令和2年2月8日に現地説明会を実施した。県内外からの見学者は約60名であった。

## 2. 第2次発掘調査

現地調査に先立ち、発掘調査工事は「すさみ串本道路建設事業に伴う里野中山城跡第2次発掘調査工事」として、令和3年10月15日から12月20日までの工期で有限会社立合建設に再委託した。また、航空撮影及び基準点測量は、「一般国道すさみ串本道路建設事業に伴う里野中山城跡第2次発掘調査に係る航空写真撮影及び基準点測量委託業務」として、三次元レーザ測量は「一般国道すさみ串本道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る三次元レーザ測量業務委託」として、令和3年10月29日から令和4年1月15日の契約期間で株式会社NAC総建に再委託した。

現地調査は、令和3年10月末に準備作業をおこない、11月1日より掘削作業を開始した。伐根を行なながら表土等を人力で掘削して遺構面精査をおこない、近世以降の石垣や階段を検出した。掘削作業や足場による写真撮影が終了した11月12日に三次元レーザ測量を、11月15日にラジコンヘリコプターを利用して航空写真撮影と写真撮影用足場を利用した写真撮影を実施した。その後、11月19日にかけて遺構実測作業や補足調査・片付けをおこない、11月24日に現地でのすべての作業を終了した。

## 第4節 調査の方法

### 1. 調査手順

発掘調査は当文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006）に準拠して行った。発掘調査で使用した調査コードは第1次調査が19-41・012（2019年度—すさみ町・里野中山城跡）、第2次調査が21-41・012（2021年度—すさみ町・里野中山城跡）である。記録資料及び出土遺物はこの調査コードを用いて管理している。

### 2. 地区割（図4～6）

遺構実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割の基準線は、第1次調査・第2次調査とも共通である。平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）第VI系の座標軸を使用し、里野中山

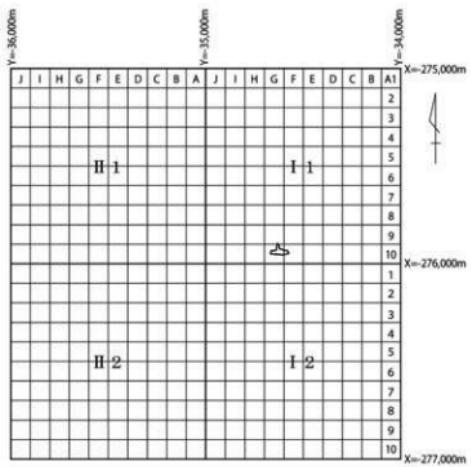


図5 地区割(大区画)

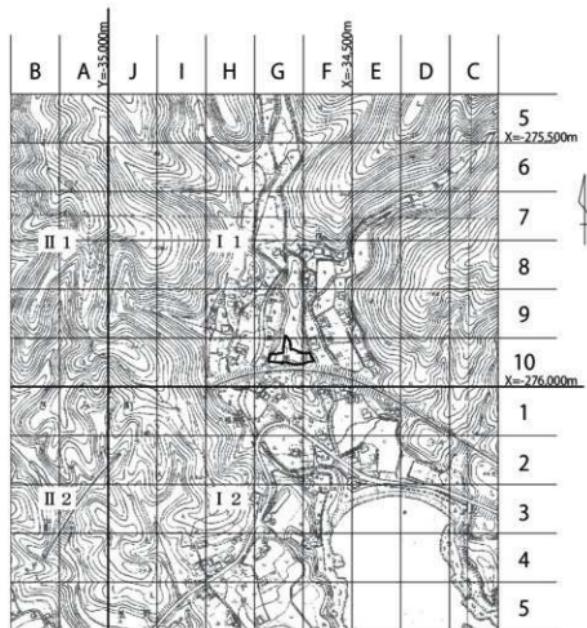


図6 地区割(中区画)

城跡を網羅する区切りが良い北東隅の数値を中区画の基点（X = -275,000 m、Y = -34,000 m）とした。なお、調査においては全て一つの大区画内におさまることから大区画を表記していない。中区画の基点から、西方向および南方向に各々 100 m 毎に区切った区画を 1 単位とした区画を設定し、基点から西方向へ大文字アルファベットで A～J、南方向へアラビア数字で 1～10 と表記した。さらに中区画の中で 4 m 四方の区画を 1 単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字で a～y、南方向へアラビア数字で 1～25 と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、4 m 四方の小区画で行い、中区画と小区画を組み合わせて表記した（例：G 10e15）。調査区は、中区画で F 10、G 10 の範囲内に相当する。

### 3. 記録

記録は写真撮影と図面作成を行った。

写真撮影は、フルサイズデジタルカメラ並びに中判デジタルカメラで足場等から担当者が行った。撮影に際しては色の正確さを期すためにカラーチャートを写しこみ、ファイル形式は RAW 形式で撮影した。委託業務によりラジコンヘリコプターによる調査付近の全景を撮影した他、各調査区の俯瞰写真撮影を実施した。

記録図面は、実測による  $S = 1/10 \cdot S = 1/20$  の個別遺構実測図（土層断面図・遺構断面図を含む）を作成した他、調査区全体図は山城が立体的に把握できるように三次元レーザ測量により作図・記録した。

第 1 次調査では、検出した遺構番号を調査区ごとに種類・時代にかかわらず検出した順に番号を付している。また、遺構番号は調査区ごとに 3 枝で表示し、3 枝目に調査区の番号をつけたが、土壘には遺構番号はつけていない。

出土遺物は、中区画一小区画を取り上げ区画とし、遺構・層位別に取り上げている。

写真撮影については、全景写真のほかに検出した遺構のうち主要な遺構の個別写真・遺構内土層断面、調査区壁面などについて撮影している。撮影にはフルサイズデジタルカメラ・中判デジタルカメラを使用し、写真撮影用足場などからも撮影している。また、これらと別に測量業務委託でラジコンヘリコプターを利用して、航空写真撮影をおこなっており、垂直全体写真、垂直部分写真、周辺部を含めた斜め写真を撮っている。

図面作成については、測量業務委託で三次元レーザ測量を利用して図化（ $S = 1/50$ ）したもののはじめ、遺構配置図（ $S = 1/100$ ）、調査区壁面土層図（ $S = 1/20$ ）、主要な遺構平面図・断面図（ $S = 1/10 \cdot 1/20$ ）などを、技術職員・調査補助員がおこなった。



写真 4 第 2 次調査 航空写真撮影

## 第 5 節 第 1 次発掘調査の成果

### 1. 基本層序

調査地における基本層序は、形成時期などを考慮して第 1 次調査と第 2 次調査とで統一し、以

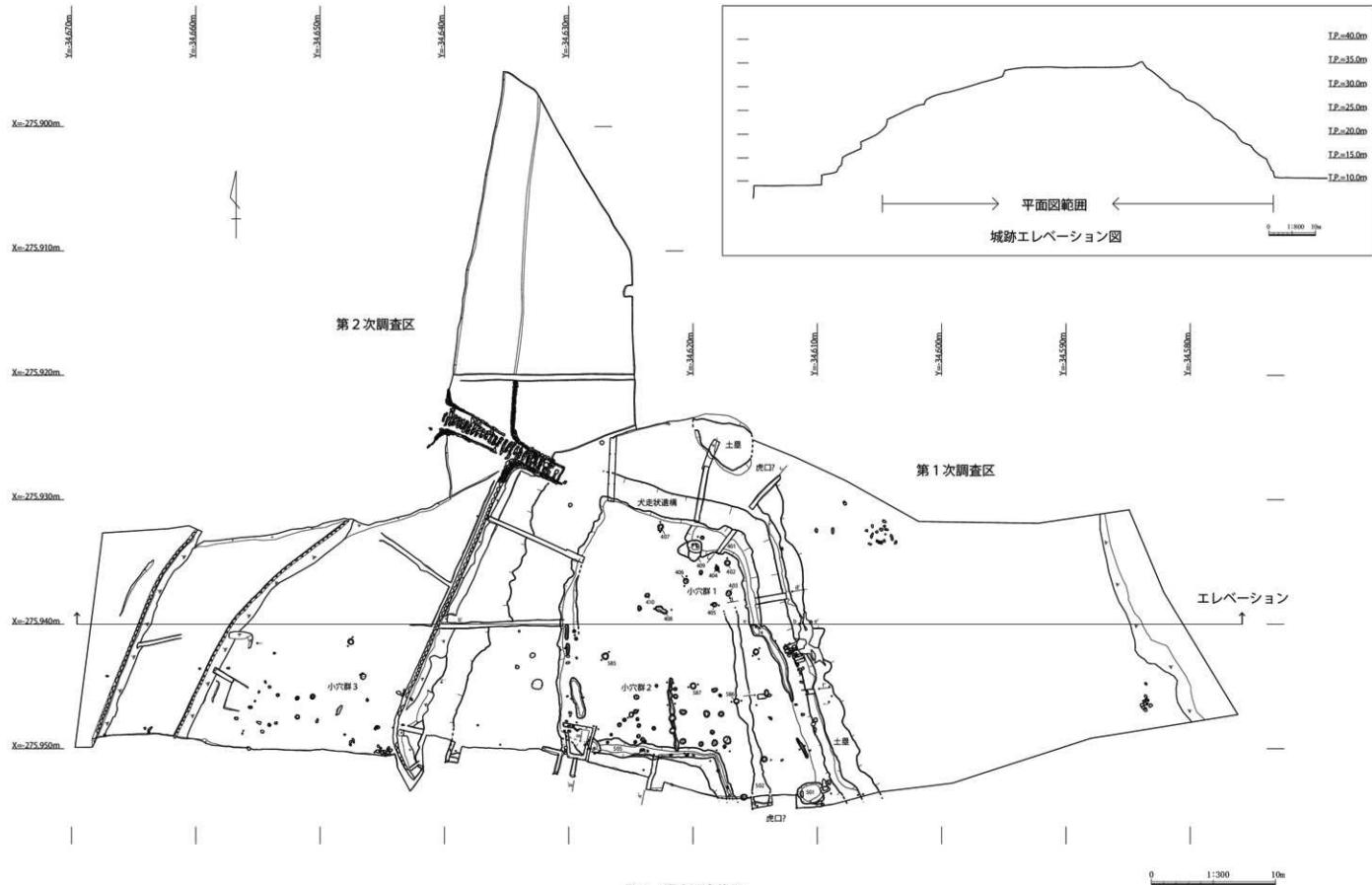


図7 調査区全体図

下のように5層に分けた。遺構検出は基本的に第4層上面で行っているが、土色・土質は場所によって若干異なっている。

第1層 表土（腐植土）。調査区のほぼ全域で確認できる。

第2層 7.5YR5/4 にぶい褐色粗砂混じり土～7.5YR4/4 褐色粗砂～小礫混じり粘質土。頂上部の曲輪内では瀬戸焼・染付青磁等の近世以降の陶器片が出土している。

第3層 10YR4/6 褐色粗砂混じり土。頂上部の曲輪付近を中心に確認している。山茶碗類の破片と施釉陶器片等が出土した。中世から近世初頭頃の堆積層。

第4層 地山：基盤層で、5YR5/6 明赤褐色風化疊混じり土を基調とするが、場所によって土色・土質が異なる。

## 2. 検出した遺構（図7、写真図版1・3）

頂上部において、土星に囲まれた曲輪を確認し、曲輪内において溝状遺構や土坑、小穴、通路状遺構などを検出した。東斜面は急で、築城当初は切岸を構築していた可能性もあるが、自然地形との判別ができなかった。東斜面に比して緩やかな西斜面は、畑が段々に造成されて旧状が明らかでなく、帶曲輪や腰曲輪が存在したか否かは判断できなかった。ただ、西斜面上位の平坦部で、小穴を検出していることから、本来は曲輪が存在した可能性もある。また、調査区北側に隣接する東斜面には、空堀状の窪みがあるが、尾根筋を分断するものではなく、城に伴うものか明らかでない。

このほか、近世以降の構造物としては、畑の石積・石段・祠跡などがある。

**曲輪（図7・8、写真図版1・3）** 土星で囲まれた平坦部の平面形状は台形状で、規模は東西12.00～19.00m、南北19.00mである。周囲には犬走状遺構や土星が巡り、これらを含めた規模は、東西21.00～30.00m、南北30.00mである。また、曲輪の南東隅には幅7.00m、長さ6.00m以上の突出部があり、虎口と曲輪を繋ぐ通廊的な空間であった可能性がある。曲輪部内の標高は33.70m～34.00mとほぼ平坦である。

**土星（図8・9、写真図版5・6）** 土星は本来、曲輪の四周にあったと考えられるが、後世の耕作や自然崩落等によって、曲輪東辺に沿う箇所以外は上部が大きく削平され、基底部が残存する程度である。土星の北東隅には一部途切れる箇所があり、南東隅以外に、ここにも虎口が想定されるが、構造等は明確でない。

土星は残存状況が良好な曲輪東側で長さ26.00m以上あり、内側の北寄りには幅2.00m前後で曲輪面より約0.70m高い犬走状遺構がある。土星頂部の幅0.50～2.00m、基底部の幅は犬走状遺構を含めて3.50～4.00m、頂部までの高さは北で1.76m、南で1.26mである。南端は線路敷設工事によって削平されている。

土星の北側は長さ4.90m以上、幅8.50m、頂部幅3.50mで、高さは2.95mと最も良好に残存し、城内の最高所も土星頂部の標高は36.80mである。曲輪の形状が台形であることから他方向の土星に比べて長さが短い。内側の南裾部には、東側と同様に、幅2.00m前後で曲輪面より1.52～1.75m高い犬走状遺構が構築されている。この段は、東側・西側より一段高くなっている。

土星の西側は長さ21.90m以上、幅4.30～11.70m、頂部幅3.80～8.35m、現存する高さ0.20mで、後世の耕作等で頂部が削平されて基底部のみが残存したものと考えられる。土星の

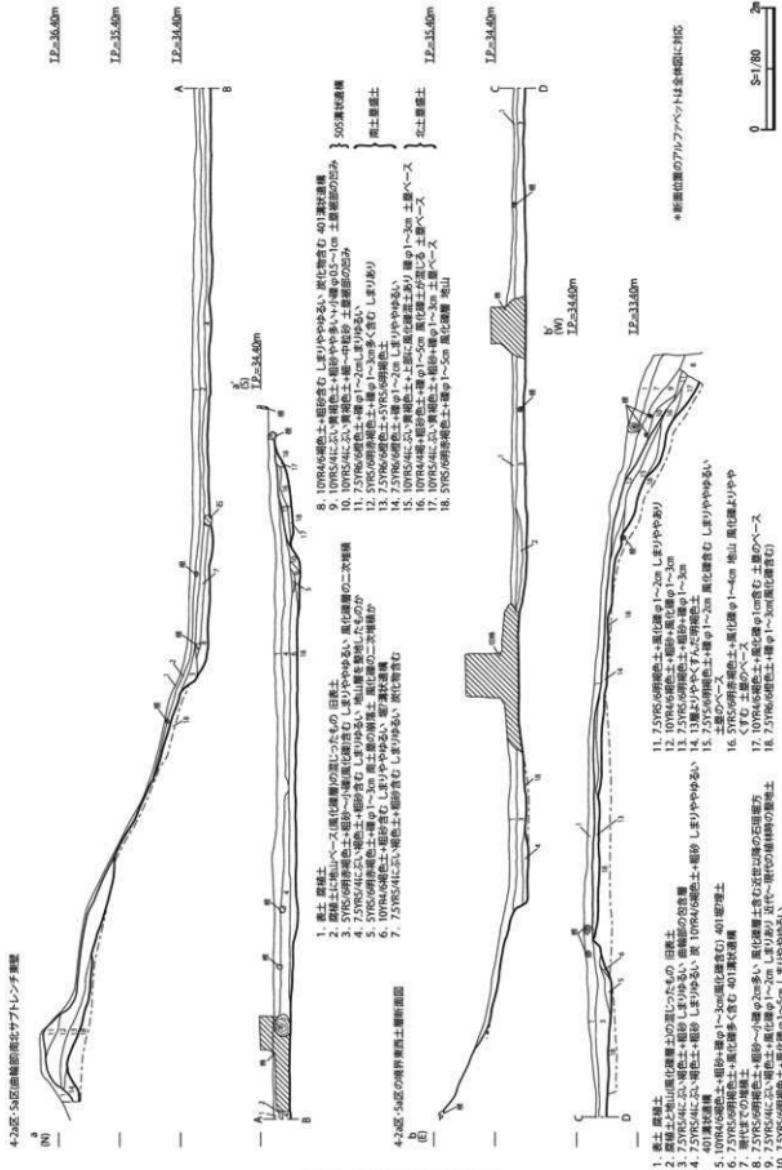
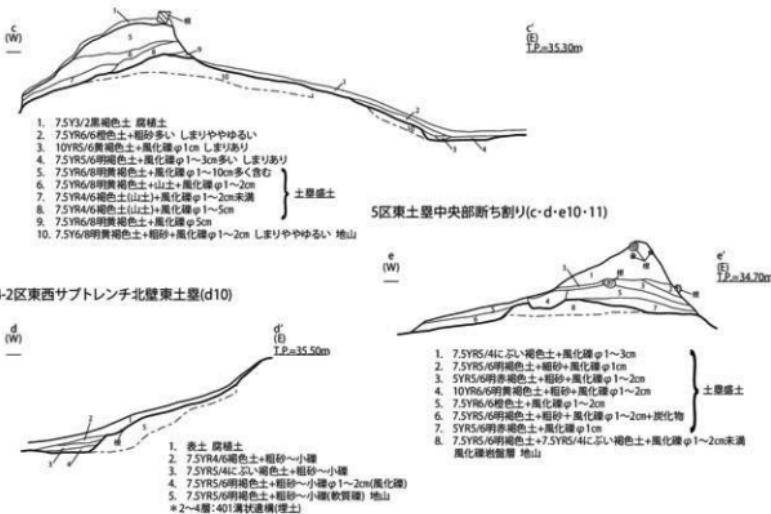


図8 曲輪部断面土層図

#### 4-2区北・東土壌コーナー据部(d-e8・9)



内側には東・北土壌のように犬走状造構があった可能性があるが、削平されて土壌との区別ができない。南側の土壌に繋がるコーナー付近で、長さ 0.60 m の石列を検出しており、本来は犬走状造構の段裾に施した基底石であった可能性がある。

土壌の南側は、長さ 12.30 m 以上、全体幅 2.50 m 以上、頂部幅 2.40 m 以上、現存する高さ 0.40 m で、南側の大部分を線路敷設工事の際に削平されている。東寄りで曲輪内との高低差 0.20 m の段を確認したことから、南側の土壌にも犬走状造構が存在したと考えられる。

なお、土壌は残りの良い箇所の断割りの土層から判断して、下半が地山の削り出しで、上半が曲輪内を平坦にした余剰土で盛土していることが明らかになっている。

**虎口** 曲輪の南東隅には突出部が取り付く。調査区の南側は線路の敷設により大きく開削されるが、旧状は小谷部や鞍部となっていたと考えられる。このため検出した頂上部の曲輪がほぼ調

査区内で完結していたことが予想でき、土星が途切れている南東部に虎口が存在した可能性は高い。和歌山県南部地域の山城の虎口の間口は、幅 7.00 m の突出部がそのまま虎口とはならず、おそらく突出部の南側で土星が内側に屈曲して虎口を形成していたと考えられる。このことは、突出部において土坑が存在することや、通路状遺構が曲輪内に続いていることからも窺うことができる。

曲輪の北東部の土星開口部は、幅 2.50 m あり、その外は空堀状の窪地となっている。虎口の土星基底部に石積み等の構造物がなく、門を構成する遺構も検出できないことからも、後世の削平の可能性もあって明確に虎口とは判断できない。ただ、南東部に正規の虎口を想定した場合、搦手的な虎口が存在しても良いことから、虎口の可能性も考えておきたい。

**溝状遺構**（写真図版 6・7）曲輪の周囲で、犬走状遺構の裾や土星裾に沿って走る溝状遺構を検出した。全周はしないものの、曲輪の排水溝の用途が考えられる。

401 溝は曲輪の北東部で L 字状に検出したもので、犬走状遺構の裾部に掘削されている。南北方向の溝は長さ 13.00 m、幅 0.30 ~ 1.40 m、深さ 0.05 m で、北端が屈曲して東西方向に 4.00 m 伸びる。東西方向は幅が広くなり 1.40 ~ 2.00 m で、深さは 0.05 m である。

505 溝は曲輪の南西部で南土星裾部に沿って逆 L 字状に検出した。東西方向の溝は長さ 10.60 m、幅 0.50 ~ 1.40 m、深さ 0.05 m で、東側で南方に折れる。南北方向の溝は南端が調査区域外となり、長さ 4.00 m 以上、幅 0.50 ~ 0.60 m、深さ 0.05 m である。遺物は土師器細片が出土している。

このほか、西土星裾部でも長さ 5.00 m、幅 0.50 ~ 1.50 m、深さ 0.05 m の溝状遺構を検出している。

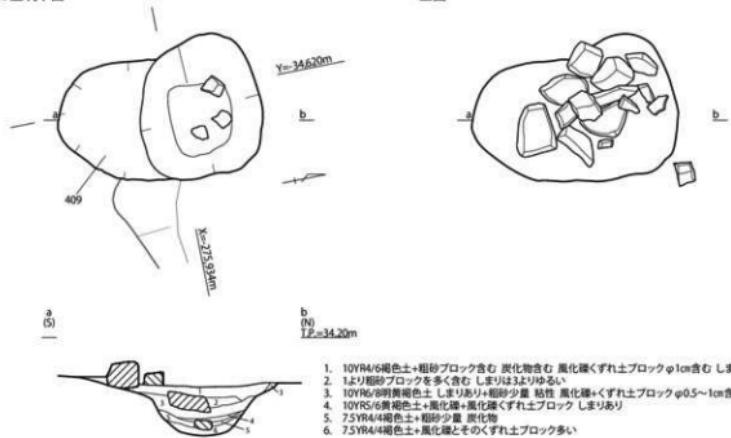
**502 通路状遺構**（写真図版 5）曲輪の東寄りで検出している。東土星と同じ軸方向に南北に走る。南側は調査区域外まで伸び、北端は曲輪の北東隅まで伸びていない。長さ 15.30 m 以上、幅 0.50 ~ 1.30 m で、地山面に 10YR4/6 褐色シルト～細砂を厚さ 0.06 m ほど盛って固めていた。周辺の山城調査での類例はないものの、虎口が想定できる突出部から続き、曲輪内の居住スペースを有効に確保できるように伸びていることからも通路と想定できる。

**409 土坑**（図 10・12、写真図版 7・9）曲輪の北東隅付近で検出した。平面形状が梢円形を呈し、規模は長さ 1.60 m、幅 1.20 m、深さ 0.40 m である。上部の埋土には 10 ~ 40 cm 大の角礫が入るが継まりがなく、中層と下層はよく締まっている。石は、平らな面をもつ角礫や割石で、礎石や東石にも使用できそうなものであることから、何らかの理由で使用していた石を片付けて廃棄した土坑の可能性がある。遺物は埋土から土師器鍋（1）が出土している

**501 土坑**（図 10・12、写真図版 7・9）調査区の南東隅で検出した。平面形状は隅丸方形で、規模は長さ 2.00 m、幅 1.70 m、深さ 1.00 m である。断面形状は逆台形で、底は平坦である。岩盤を掘削して壁面・底面は丁寧に仕上げていた。南肩部で 50 cm の石が置かれた状態で、底部の西壁に長さ・幅 45 cm の板状の石が立てかけられた状態で検出した。上面まで埋まった後、西側を中心に再掘削しているが、深さが 0.60 m と土坑底面まで及ぶものではなく、501 土坑とは別遺構と判断すべきかもしれない。曲輪内からは水甕となる土器類が出土しないことから、水溜の

409土坑下面

上面



501土坑

Y=34.611m

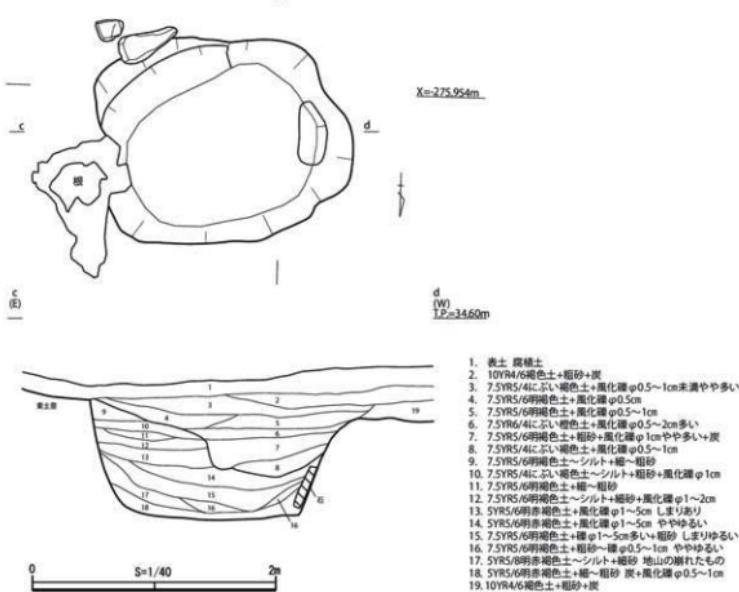


図 10 土坑

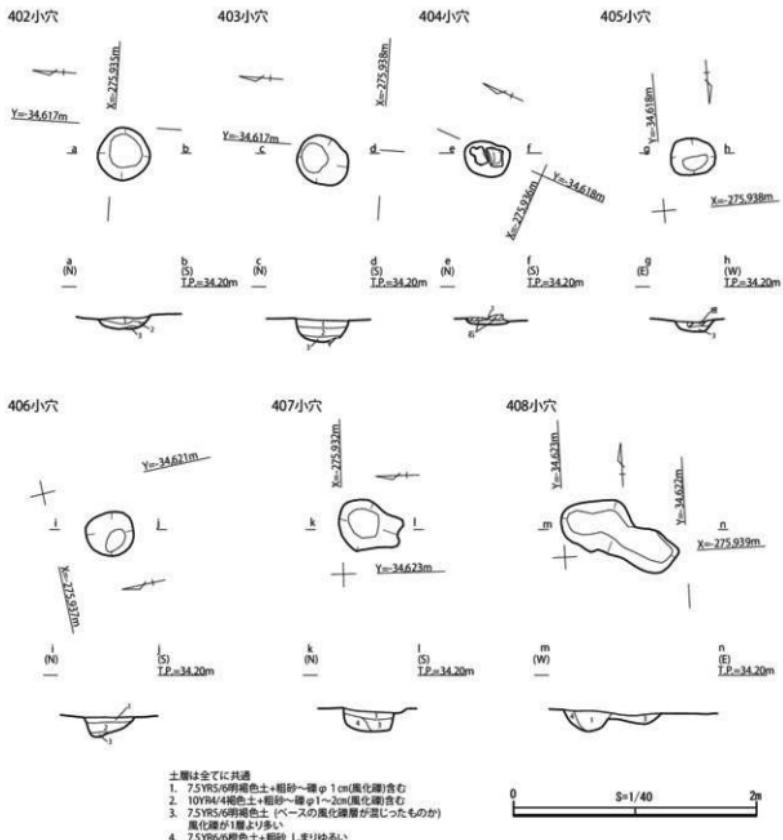


図 11 小穴群 1

可能性もある。断面観察からは、埋桶の痕跡はなく、石組なども存在しないことから、保水力がある岩盤に直接水を溜めていた可能性も考えられる。遺物は近世初頭頃の唐津焼碗片（2）が出土している。

**小穴群 1**（図 11）頂上部の曲輪の北東部で検出した 10 基余りからなる小穴群で、平面形状は円形もしくは不整梢円形を呈し、規模は 0.20 ~ 0.50 m、深さ 0.10 ~ 0.30 m である。検出した箇所が土壌に囲まれた曲輪内で大きな削平がないと判断した場合、小穴の多くが柱穴とするには浅く、また、柱痕が確認できること、規則正しい配列も見いだせないことからも掘立柱建物を構成するものではないと判断できる。遺物はどの小穴からも出土していない。

**小穴群 2**（写真図版 7）曲輪の南西側で検出した約 30 基からなる小穴群で、平面形状は円形

もしくは不整梢円形を呈し、規模は 0.15 ~ 0.50 m、深さ 0.05 ~ 0.30 m である。ほとんどの小穴は浅く、小穴群 1 と同様な理由で柱穴にはならないと考えられる。ただ、小穴が礎石の掘方であったと理解した場合、柱並びに規則性は見いだせないものの歪な建物を想定することも可能である。想定できる建物は桁行 6.00 m、梁行 4.00 m 程度で、建物軸は曲輪や溝状造構とほぼ同様であるが、調査時において建物として認識していないことから、建物の可能性があるものとしておく。遺物はどの小穴からも出土していない。

**小穴群 3** 西斜面に一段下がった平坦部、標高 33.60 ~ 33.80 m 付近で検出した 6 基からなる小穴群である。平面形状は円形もしくは不整梢円形を呈し、規模は 0.20 ~ 0.40 m、深さ 0.04 ~ 0.30 m である。配置などから掘立柱建物を構成する柱穴ではないと考えられる。遺物はどの小穴からも出土していない。

### 3. 出土遺物（図 12、写真図版 9）

遺物には、15 世紀後半から 19 世紀にかけての土師器、国産陶磁器、輸入磁器のほか、錢貨（寛永通寶）などがある。造構から出土する遺物は少なく、ほとんどが表採遺物や第 1・2 層からの出土である。

これらは 16 世紀後半から 17 世紀初頭頃にかけての遺物が主流を占め、その時期に城館での生活の痕跡が濃く画期があったことが窺える。

出土遺物の特徴としては、土師器には焙烙があるが供膳具である皿は出土していない。近辺の中世城館の土器組成では土師器皿が一定量出土し、この傾向は江戸時代に入っても変わらないようである。城館ではないものの和歌山城下の武家屋敷地でも土師器皿が一定量を占めることが分かっている。国産陶器には備前焼・唐津焼・瀬戸美濃系陶器がある。備前焼には徳利・擂鉢があるが壺・甕などの貯蔵具は出土しない。この組成は、飲料水の貯蔵を重要視する中世山城としては異例と言える。また、擂鉢では 16 世紀後半から 17 世紀初頭のものに限られる

唐津焼には碗・皿・鉢が、瀬戸美濃系陶器には天目碗・皿があり、やや時期幅は認められるものの、各種類とも器種は限定的である。中国製磁器では青磁皿、染付碗・皿があるが、白磁は出土しない。また、中国製染付については漳州窯に限られ、城の画期と重なる。

### 第 6 節 第 2 次発掘調査の成果（図 7、写真図版 8）

基本層序は基本的に第 1 次調査と整合するが、第 3 層がなく、第 2 層にも遺物は含まれない。

調査区は、第 1 次発掘調査で曲輪や土塁が検出された主郭部の北側にあたり、工事用進入道路が建設される尾根筋から西斜面にかけての範囲に相当する。主郭北東部の土塁背後の東斜面には、幅約 7.00 m、深さ約 1.00 m、長さ約 10.00 m の窪みが確認でき、調査前にはこれが尾根部を切断する堀切や堅堀の一部で、その延長となる尾根筋や西斜面にかけては、埋め戻された堀切の続きが残存していると判断されていた。調査の結果、東斜面の窪みの続きは尾根筋や西斜面では確認できなかった。これにより、尾根続きとなる城北側の遮断施設は土塁のみであることが明らかになった。検出した構造物としては近世以降と考えられる石段や石垣があり、第 4 層上面で検出している。

**石段**（写真図版 8） 調査の南端付近で検出したもので、その一部は第 1 次発掘調査でも確認

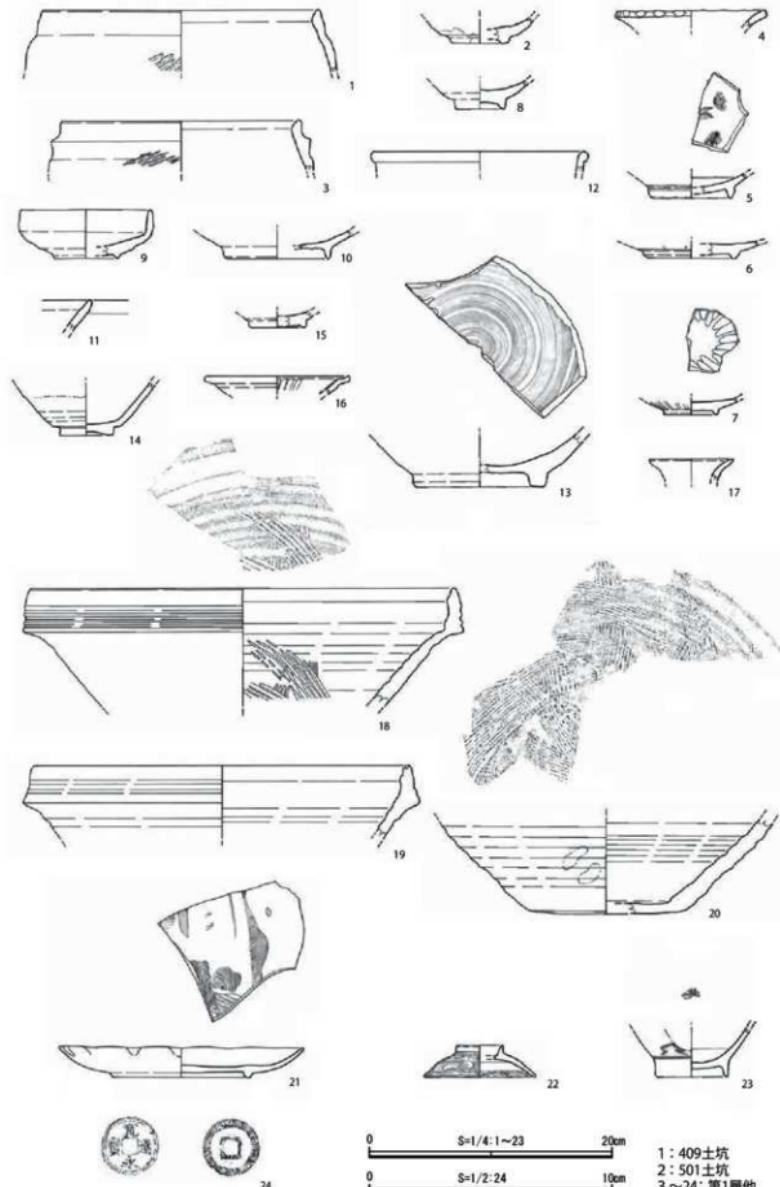


图 12 出土遗物

されている。丘陵頂部から北西に向かって下り西麓に至るもので、延長約 11.00 m を検出した。幅 1.35 ~ 2.00 m で下方に向かって広くなっている。一段の幅 30 cm 前後で、高さ 15 ~ 25 cm を測る。検出した最上段から下段までの高低差は 7.70 m で、29 段を数える。石段の縁石は石垣とつながっており、同時期に存在していたことが窺える。

**石垣** 石垣は、検出した石段の中央付近から北方向に延びる。第 1 次調査で確認した石垣と一緒にもので、標高 31.0 m 付近に築かれている。高さ 0.60 m で基底部で 20 ~ 40 cm の礫を横置きし、その上は斜め方向に積んでおり、上方ほど小振りな礫を使用している。畠の開墾に伴うものと考えられるが、石垣の上下には平坦地ではなく、一般的な段々畠とは様相を異にする。

## 第 7 節 まとめ（図 13）

里野中山城跡は、一連の発掘調査で、第 1 次発掘調査の対象地を主郭とする城であることが明らかになった。構造は、丘陵頂部をやや掘り窪めて曲輪をつくり、その際に出土土を削り出した土星の上に盛って更に高くしている。また、北東部の土星の切れる箇所と南東部付近に虎口が想定できる。

第 2 次調査では尾根続きとなる北側の遮断施設は土壁のみであることが明らかになるとともに、城背後の状況が明らかになった。通常、尾根部に城を築く場合、堀切で遮断して城の内外を区画することが通常で、土壁と併用することでより強固になる。このため、土壁のみで遮断する里野中山城跡は異例であるかもしれない。城の東斜面は切岸によるものか急斜面であるが、西斜面は緩斜面となる。畠の開墾によりやや広めの段が造成されおり、本来、腰曲輪などが存在した可能性がある。



図 13 里野中山城跡縄張り図

第 1 次発掘調査の南側は丘陵を分断するように J.R. 紀勢本線が敷設され、旧状は明らかでない。ただ、現地形から判断して南西部から入り込む谷の続きが線路に沿うように存在し、鞍部を挟んで線路南側の丘陵に繋がっていた可能性が高く、鞍部付近に遮断施設として切岸や堀切



写真 5 線路より南の平坦部に散乱する石塔類

が構築されていた可能性も考えられる。また、線路南側の丘陵には、曲輪状の平坦地や堀切状の遺構が確認できる。その頂部となる線路と接する箇所には、長さ・幅が 20.00 m 弱のやや造成が甘い平坦部があり、そこには石仏や五輪塔などが集められている（写真 5）。堀切状遺構は幅 6.00 ~ 7.00 m で、その周辺は造成が甘いが、それより南側の丘陵先端部には、幅約 20.00 m、長さ 25.00 m 程度の平坦部が造成されている。この平坦部は、起伏がほとんど見られないことからも近現代に畑や宅地として使用されていた可能性が高い。

これら南側の遺構の評価については、城の一部とするかどうかは里野中山城跡の位置づけにも大きく関わってくる。城の一部とした場合は、里野中山城跡が単郭式ではなく、丘陵尾根上に曲輪を複数配する典型的な連郭式山城とすることが可能である。ただ、今回の調査で明らかになつたように、北側の尾根筋の遮断が弱く、南を一連のものとした場合は北側の防御が脆弱でアンバランスであることが否めない。周知の遺跡となる前、里野中山城跡は里野城屋敷の名前で語り継がれていた。その名を積極的に評価する訳ではないが、南側は城以外の構造物で一連の城とは捉えず、単郭の館城あるいは屋敷跡と評価することもできるが、明確でない。

里野中山城跡は、出土した遺物から 16 世紀後半から 17 世紀初頭頃に活況を呈していたことが窺える。日高・西牟婁地域の山城では、出土する遺物から判断して山城で常住するのは、主に 15 世紀中頃から 16 世紀前半とされ、16 世紀中頃以降の遺物が山城から出土することはほとんどない。これは、山城が廃絶するのではなく、龍松山城跡の鉄砲玉の出土例にあるように、常住しなくなつた後も少なくとも 16 世紀後半までは一時的に城に詰めることがあったと理解されている。それであっても、日高・西牟婁地域では、16 世紀後半から末、もっと限定するなら羽柴秀吉の紀州攻めがあった天正 13 年（1585）には、ほぼ城としての使命を終えている。そのなかにあって、里野中山城跡の存続時期については天正 13 年以降も使用されており異例である。ただ、同じような消長を示す那智勝浦町の藤倉城跡（館部）の存在については注目しておきたい。

江住地区は、16 世紀後半で周参見氏の影響下であった可能性を先にも指摘したが、中世において周参見氏は日置川流域に本拠を置いた安宅氏などとともに熊野水軍の一翼を担つた。秀吉の紀州攻めの後も本領を安堵され、秀吉の朝鮮出兵にも水軍として参陣し、大坂夏の陣（元和元年（1615）に豊臣方に味方して、その後は帰農したとある。史実に基づく内容であるかどうかは明らかでないものの、天正 13 年以降 17 世紀初めまで里野中山城跡が機能している事柄は、周参見氏と連動しているようにも窺え、里野中山城跡は周参見氏やその一族に関連する城であると評価することもできる。

ただ、遺物量は少ないものの、17 世紀中頃以降 19 世紀にかけての遺物も出土している。この時期の遺物は、江戸幕府から元和元年に出された「一国一城令」以後であることからも直接城に関わるものとは考えられず<sup>9</sup>、城の跡地に民家等の屋敷がつくられた可能性もある。また、祠が祀られていたことからも、それに関わる遺物であった可能性も考えておきたい。

表2 里野中山城跡出土遺物觀察表

法量の(+)は陶片した大きさ。はそれ以上。色調の内・外・顔は「顔」を省略している。

組合 番号	種類 器種	地区	遺構 組成	法量 口徑 高さ 底径	重量 kg	現存率	技法・調整	色調	胎土	備考	
1	土器	4.2m区	遺構409	(204) 51+	-	1口徑 5% 2%	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ・テチメ平行 縦5% ヨコナデ	内:7.5YR8/4に4.5YR8/4 外:10YR8/1(3.3) 縦:5YR7/4に2.5YR7/4	黒 1.5mm以下の白色陶 化を含む場合 IGC末～17C初	無釉瓦 IGC末～17C初	
2	唐津燒 鉢	5m区南側溝 上部	-	21+	-	底部 20%	灰輪 灰台付高輪 内底部凹削	内:2.5YR3-2灰輪 外:2.5YR3-3に4.5YR 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 17C初	
3	土器	4.1区中央 壁根土	192)	42+	-	1口徑 10% 2%	内面ヨコナデ 外面ヨコナデ・ナナメ平行 縦5% ヨコナデ	内:7.5YR8/1(3.3) 外:2.5YR3-2灰輪 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 17C末 IGC未	
4	中国製青磁 輪花瓶	5m区西端 概観	-	120+	-	-	入人	内:5.5YR7/4オーライブ(輪)(輪)	黒	無釉焼元 藍色斑 IGC後半	
5	中国製青磁 瓶	直深	-	21+	0.50	底部 40% 内面ヨコ彫刻・花文	空瓶 軽い入人 貨物軸用 内部穿孔複数 縦:5YR7/4に2.5YR7/4	内:NR9.5YR8/1 外:5YR8/1(3.3) 縦:5YR7/4に2.5YR7/4	黒 青磁斑 IGC初	無釉焼元 青磁斑 IGC初	
6	中国製青磁 瓶	4.1区 斜面	直深	-	1.5+	670	底部 45% 高白存在・内底部露薪	内:2.5YR3-1灰 外:5YR8/1(3.3) 縦:5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 青磁斑 IGC初	
7	中国製白磁 瓶	4.1区南 壁根土	-	15+	120	底部 50% 高白内露薪	内:10YR7/4灰白 留助・新:30YR8/1灰白	黒	無釉焼元 17C初		
8	唐津燒 瓶	4.1区南 壁根土	-	24+	380	底部 50% 灰輪 古白内露薪 内底部丸の目輪跡	内:5YR6-2灰白 外:5YR7/4(3.3) 縦:5YR7/4に2.5YR7/4	黒 -無釉焼元 17C中頃	無釉焼元 IGC初		
9	唐津燒 瓶	4.2m区 土質 sond	遺構50号	101.6	40	(3.1) 25% 底部	灰白 内部内露薪 内底部丸の目輪跡	内:5.5YR7/4オーライブ(輪)(輪) 外:10YR8/1に4.5YR8/1	黒	無釉焼元 17C初	
10	唐津燒 瓶	5m区北 壁根土	-	26+	(8.2)	0.33% 底部	内面彫刻 外内面彫刻	内:2.5YR3-1灰白 外:10YR8/2灰白	黒	無釉焼元 IGC末～17C初	
11	唐津燒 瓶	4.1区北	第1層 壁根土	-	43+	(0.4)	底部 内面鉄輪 内底部に沿て網目模有 内底部凹削	内:10YR7/1(3.3) 外:10YR8/2(3.3) 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒 -無釉焼元 17C後半	無釉焼元 IGC後半	
12	唐津燒 (片)	-	土	6750	17+	-	1口徑 5% 1口縫部不規伏 灰輪 灰帶付近露薪	内:2.5YR5-1灰 外:2.5YR5-2灰 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 17C初	
13	肥前燒 器皿	4.1区 壁根土	-	24+	(8.2)	底部 32%	灰輪 内外鉄輪付近露薪	内:10YR7/1(3.3) 外:10YR8/2(3.3) 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 17C後半	
14	肥前燒 器皿 丸口茶碗	5m区東南 壁根土	第2層	-	43+	43	底部 内面土手から内露薪 内手子幕落・刻 50% ハート形	内:10YR17/1灰 外:10YR8/2(3.3) 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒 -無釉焼元 IGC未	無釉焼元 IGC未	
15	肥前燒 器皿 丸口茶碗	-	土	-	114+	102	底部 30% 高白付近露薪	内:10YR8/1灰 外:10YR8/2(3.3) 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 IGC後半	
16	肥前燒 器皿	-	-	111.6	15+	1口徑 5% 1.5% 灰輪	1口縫部方向に露薪 内面丸ノミによる剪刃 リープ 灰:7.5YR7/4に2.5YR7/4	内:10YR6/4に4.5YR8/1 外:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒	無釉焼元 17C初	
17	唐津燒 器皿	4.2m区 壁根土	整塊	6.7	194	-	1口縫部 10%	内面鉄輪付近 外内面鉄輪付近	内:2.5YR3/2灰白 外:3.5YR7/4灰白	黒 1mm以下の白色陶 化を含む場合	無釉焼元 IGC未
18	肥前燒 器皿	4.1区南 壁土巣土上	第1層 壁根土	194.0	97+	-	10% 内面鉄輪ナダ・ヨコナデ・内面鉄輪ナダ・ナダ 10mm 1.2cm ナタメ方向	内:5YR8/2灰白 外:2.5YR5/4灰 内:3.5YR7/2灰白 外:2.5YR5/4灰白	黒 -無釉焼元 IGC未	無釉焼元 IGC未～17C初	
19	唐津燒 器皿	4.1区中央 壁根土	-	79+	42.6	底部 5%	内面鉄輪ナダ・ヨコナデ・内面鉄輪ナダ・ナダ 10mm 1.2cm 内面鉄輪ナダ・ヨコナデ	内:10YR8/2(3.3) 外:10YR8/2(3.3) 縦:7.5YR7/4に2.5YR7/4	黒 2mm以下白色陶 化を含む場合	合反及反覆燒 IGC未～17C初	
20	唐津燒 器皿	-	直深	(205)	60+	-	1口縫部上方に鉄輪 外鉄輪に凸輪 2本 内鉄 輪5% 内面鉄輪ナダ・ヨコナデ	内:10YR8/2(3.3) 外:10YR8/1(3.3) 縦:10YR8/1(3.3)	黒 1mm以下白色陶 化を含む場合	無釉焼元 17C初	
21	肥前燒 器皿 輪花瓶	4.1区 壁根土	第1層 壁根土	1799	25	(11.3)	20% 安輪 1輪付近 内面鉄輪	内:10YR8/1(3.3) 外:5.5YR7/4(3.3) 縦:5.5YR7/4(3.3)	黒 -無釉焼元 IGC未	無釉焼元 IGC未	
22	唐津燒 器皿	4.1区 壁根土	第1層 壁根土	693	26	輪付 52%	安輪 輪付近 内面鉄輪ナダ・ヨコナデ 内面鉄輪 内面鉄輪付近	内:NR9.5YR8/1 外:5YR8/2灰白 縦:5.5YR7/4(3.3)	黒	無釉焼元 17C	
23	肥前燒 器皿 輪花瓶	4.1区 壁根土	第1層 壁根土	-	41+	(5.7)	底部 50% 花文	内:10G-1(3.3) 外:5.5YR7/4(3.3) 縦:5.5YR7/4(3.3)	黒 -無釉焼元	無釉焼元 17C	
24	器皿 輪花瓶	4.25区 壁根土	壁根土	2.45	0.1	金合 2.55 g	100% -	-	-	古董木	

### 第3章 結城城跡の第1次発掘調査

## 第1節 環境(図14・15)

結城城跡は和歌山県東牟婁郡串本町有田上地内に所在し、穿入蛇行を繰り返しながら南流して太平洋に注ぐ有田川左岸に位置する。周辺海岸部は複雑に入り組んだアーチ式海岸が続き、吉野熊野国立公園の一部を構成する。有田川河口も入江が形成されて良好な湊となっており、近世にはカツオ漁がさかんに行われた。また、海岸線に沿うように熊野参詣道(大辻路)が通過している。現在は国道42号、JR紀勢本線が通り、最寄り駅は紀伊有田駅である。

有田川流域は近世以降、下流域の有田浦（有田下村）、中流域の有田上村、上流域の吐生村に分かれていたが、明治 22 年に合併して有田村になり、更に昭和 30 年に周辺の村が合併して串本町になっている。有田川流域の旧三村は一様に過疎化が進み、なかでも旧有田上村・旧吐生村において著しい。

結城城跡（22）は河口からは約1.2km上流にあり、付近は狭小な谷の山裾に宅地が点在する。川に沿って水田が広がるが、最近は休耕田が多くなっている。結城城跡の立地は、風吹山から南西に派生する標高88mの丘陵の頂部付近を占地して築かれている。丘陵頂と麓との比高は80mで、北東側の鞍部との比高は30mで、一見独立丘陵状を呈する。西麓には臨濟宗妙心寺派の知足山宝生寺が、その北側の川沿いには有田三村の氏神である有田神社が鎮座する。有田神社には樹齢1000年を越すとされるクスノキがあり串本町指定の天然記念物に指定されている。



図 14 結城城跡の位置

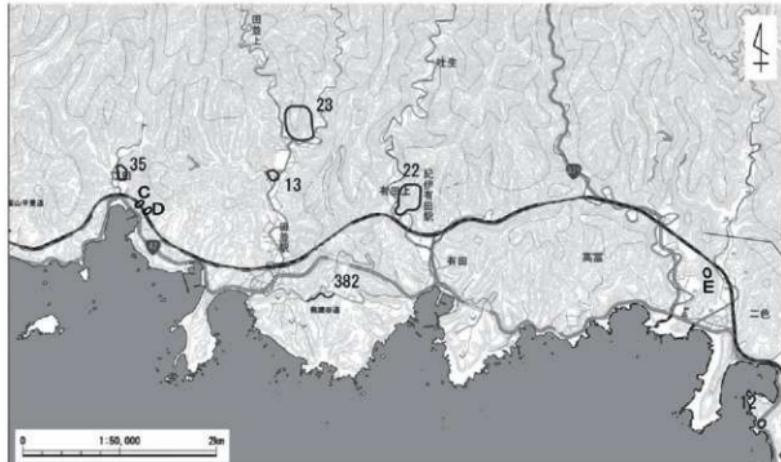


図 15 周辺の遺跡

中世に遡る文献には結城城跡は登場せず、築城時期や城主については明らかでないが、宝生寺に伝わる『知足山宝生錄』(昭和4年)によると、永享12年(1440)に室町幕府に反旗を翻して討ち死にした下総国の結城氏朝が、実は有田の地に逃れ住み、城ノ森に築城したとある。

周辺の遺跡としては、串本町田並上所在の田並上城跡(23)や、同町江田所在の浦屋敷跡(25)のほか、最近同所で確認された西畠山西城跡(C)・西畠山東城跡(D)や同町二部所在の二部城跡(E)がある。

田並上城跡は、南下して太平洋に注ぐ田並川と小川の合流地点周辺に位置する。築城年代も城主も不明であるが、山頂に土壘を巡らせた曲輪と複数の堀切をもつ。

浦屋敷跡は、開析谷を蛇行しながら南下して江田浦に注ぐ江田川の左岸に位置する。分布調査によって新規認定された遺跡で、石垣や井戸が確認されている。

近世の文献にも登場する西畠山西城跡は、しばらくその所在が明らかでなかったが、浦屋敷跡の近くにおいて、江田湾に臨む二つ丘陵先端部で確認された。それぞれの丘陵を二重の堀切で区画するものであるが、西畠山西城跡が本来どちらの城を指すのか、また、二つの丘陵部を併せて西畠山西城跡としていたのか明らかでない。

二部城跡(写真6)は、二部川と高富川に挟まれた山頂に位置し、串本町に伝わる民話では、「尉(城)の山」の名で登場している。規模は小さく構造的には単純で、山頂部の曲輪とその南に掘削された堀切などからなる。

結城城跡は、分布調査で陶磁器や土師器等の中世土器が採取されており、試掘確認調査では城跡の南西麓と南麓の3箇所のトレーニングにおいて中世の遺構面を確認し、他の3箇所のトレーニングでは中世から近世にかけての遺物の散布状況がみられた。



写真6 二部城跡

## 第2節 発掘調査の経過

発掘調査までの経過は里野中山城跡第1次調査と同契約であったことから省略する。

結城城跡は分布調査や確認調査の結果から、曲輪が確認されている山頂部とそこから南西方向に嘴状に伸びる丘陵部及び南西麓から南麓までを範囲とする。丘陵部分は架橋で跨ぐことから調査の対象とはなっておらず、南西麓と南麓に設置される橋脚部を中心に発掘調査が実施された。このうち、南西麓の調査が第1次発掘調査となる。なお、南西麓の橋脚は現在の串本町管理の町道と重なり、北側に隣接して町道の付替え工事が行われることから調査対象地となっている。

調査では堆土置き場確保のため、現行の町道北側にある町道付替予定地の水田を1区、中央の町道部分を2区、町道南側の家屋基礎を含んだ部分を3区とし、1区、3区、2区の順で調査を実施した。各調査区とも第1～3層を機械で掘削し、それ以下の第4層を人力で掘削し、第5層

上面で遺構検出をおこなった。遺構の人力掘削ののち、写真撮影用足場等からの写真撮影、調査補助員の実測図の作成作業等の埋蔵文化財の記録資料の作成をおこなった。

基準点測量は、「すさみ串本道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る航空写真撮影・基準点測量委託業務」として、結城城跡の発掘調査においては、基準点測量業務のみを実施し、令和元年8月21日に4級基準点を2点設置した。結城城跡の現地調査は、令和元年8月19日～令和元年9月14日の期間で実施した。

調査においては西側が農業用水路に接し、また2区には水道管が埋設されていたことから水道管の周囲は調査対象地から除外している。

### 第3節 調査の方法

#### 1. 調査の手順

発掘調査は文化財センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006）に準拠して行った。発掘調査で使用した調査コードは19-42・022（2019年度－すさみ町・結城城跡）である。記録資料及び出土遺物は、この調査コードを用いて管理している。

#### 2. 地区割（図16～18）

実測図作成の際に用いた調査区の地区割は、平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）第VI系の座標軸を使用し、数値はm単位で表示している。地区割の基点はX=-278,000m、

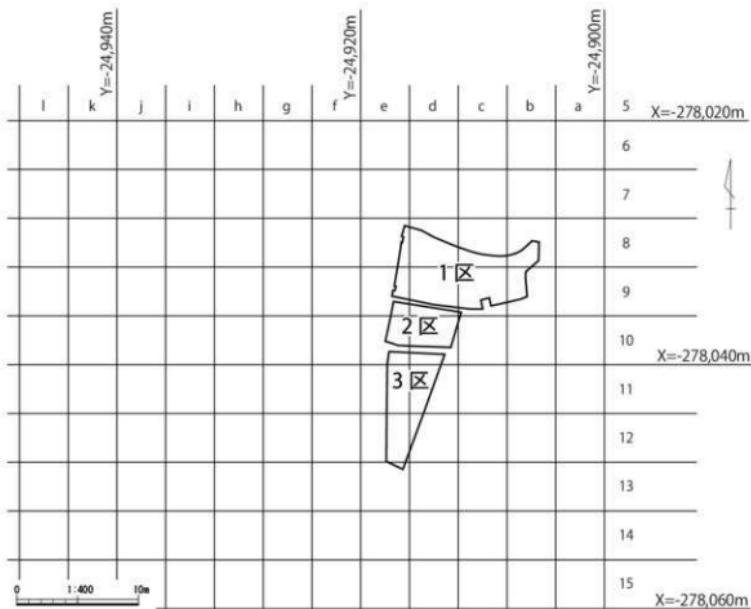


図16 調査区区割り図

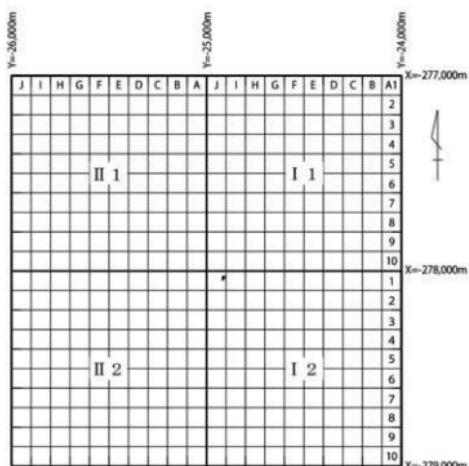


図 17 地区割（大区画）

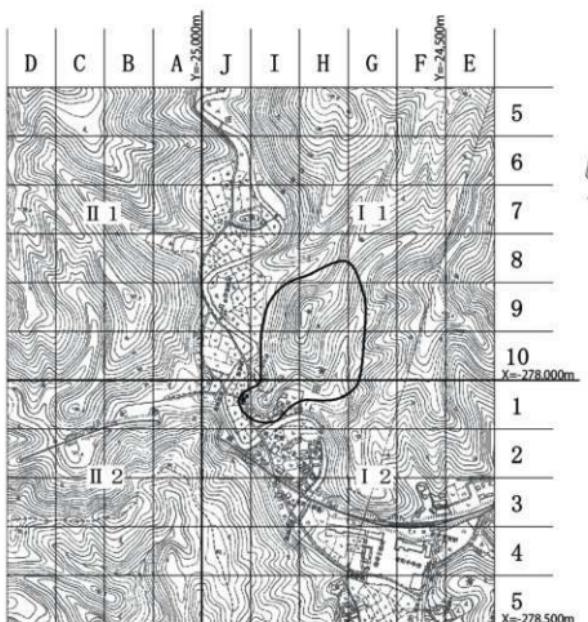


図 18 地区割（中区画）

$Y = -24,000$  m とし、この基点から中区画、小区画の地区割を行った。中区画は、この基点から西方向と南方向にそれぞれ 100 m 四方の区画を 1 単位として設定し、北東端を基点として西方向へ大文字アルファベットで A～J と、南方向へアラビア数字で 1～10 と表記した。さらに中区画を 4 m 四方に区画し、それを 1 単位として小区画を設定した。小区画は、北東端を基点として西方向へ小文字アルファベットで a～y と、南方向へアラビア数字で 1～25 と表記した。今回の調査区は中区画で J 1 に相当する。

### 3. 記録

写真撮影は、フルサイズデジタルカメラ並びに中判デジタルカメラで担当者が行った。撮影に際しては、色の正確さを期すためにカラーチャートを写しこみ、ファイル形式は RAW 形式で撮影した。

記録図面は、実測による S=1/10・S=1/20 の個別遺構実測図（土層断面図・遺構断面図を含む）を作成した。

## 第4節 調査成果

### 1. 基本層序

調査地における基本層序は、以下である。

- 第1層 耕作土 : 5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト。層厚は 0.12 ～ 0.30 m。
- 第2層 近現代の水田耕作土・床土 : 10YR4/4 暗褐色粘質土。鉄分の沈着が多くみられる。層厚は 0.05 ～ 0.15 m。
- 第3層 砂礫層 : 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂～礫混じり粘質土～粘質シルト。出土する遺物は中国製青磁碗、瀬戸美濃系陶器天目茶碗、土師器鍋などの中世の遺物が主体であるが、近世の遺物も含み、近世以降の有田川の氾濫による堆積層と考えられる。層厚は 0.10 ～ 0.30 m。
- 第4層 砂礫層 : 2.5Y 黄褐色細砂～礫混じり粘質土～粘質シルト。出土する遺物は中国製青磁碗、備前焼甕、瀬戸美濃系陶器深皿、土師器鍋、瓦質土器釜、土鍤などの中世遺物を含む。基本的に近世の遺物は含まず、中世以降の有田川の氾濫による堆積層と考えられる。層厚は 0.05 ～ 0.20 m。
- 第5層 基盤層 : 10YR5/4 にぶい黄褐色角礫混じり粘質シルト。

### 2. 検出した遺構（図 19・20）

調査区は 1 区・2 区・3 区に分けて調査を行なっているが、遺構番号は調査時に調査区ごとに 3 衔で表示し、先頭番号に各調査区の番号をつけ 101・201・303 などとしており、本報告でもそれを踏襲し、説明においても調査区ごとにおこなう。

#### 1 区（写真図版 10・11）

1 区の地山面は東端が一段高く、約 0.10 m 下がって西側に向かってわずかに下っている。第 5 層上面（標高 7.00 ～ 7.20 m）において土坑、柱穴、小穴等を検出した。柱穴は東の一群（柱穴群 1）と西の一群（柱穴群 2）に分けることができる。

**土坑（図 21）** 1 区南東部で 4 基の土坑を検出した。このほか、調査段階で柱穴としている遺

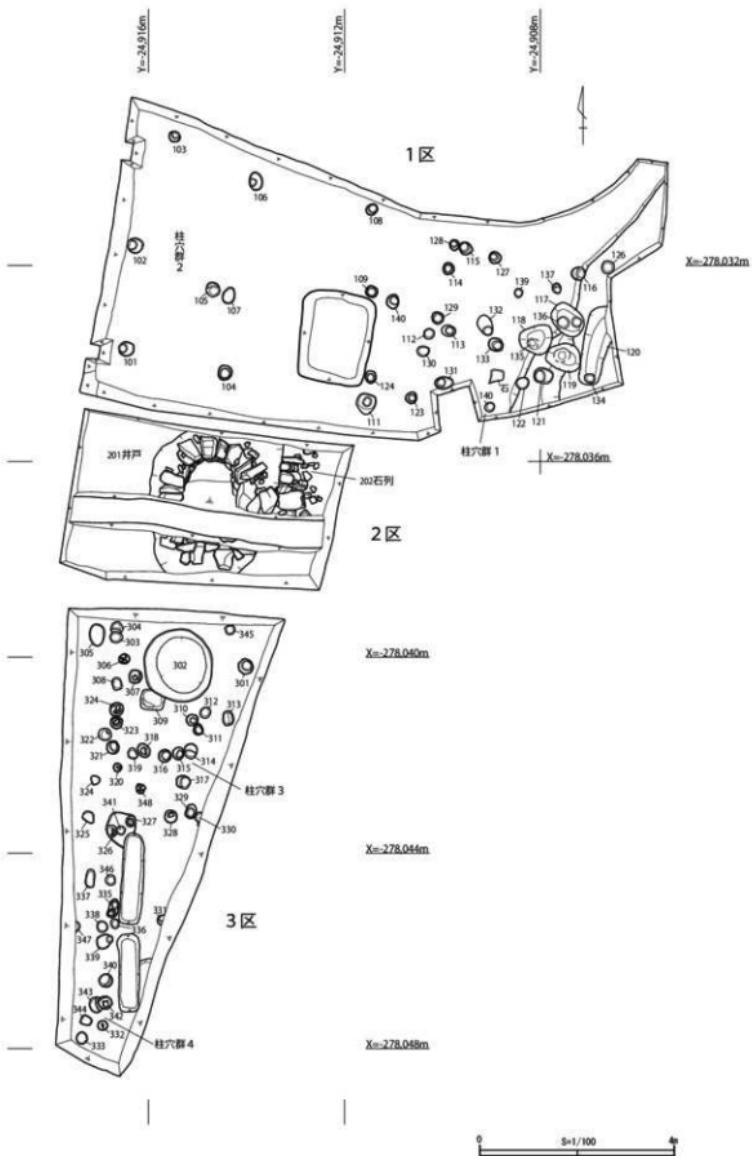
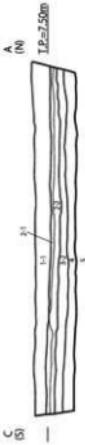


図19 調査区全体図

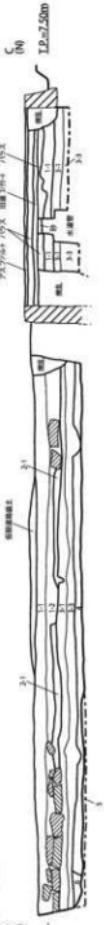
1区 北端



1区 西端



2-3区 西壁



1-1. 575/2オリーブ色粘土シルト 粘土質  
1-2. 23Y/2褐色粘土シルト 粘土  
1-3. 10YR4/4褐色粘土シルト 粘土  
2-1. 575/28オリーブ色粘土  
2-2. 575/28オリーブ色粘土  
3-1. 575/28オリーブ色粘土  
3-2. 575/28オリーブ色粘土  
3-3. 575/28オリーブ色粘土  
4. 10YR5/4褐色粘土シルト  
5. 10YR5/4褐色粘土シルト  
6. 23Y/3褐色粘土

1-1. 575/2オリーブ色粘土シルト 粘土質  
1-2. 23Y/2褐色粘土シルト 粘土  
1-3. 10YR4/4褐色粘土シルト 粘土  
2-1. 575/28オリーブ色粘土  
2-2. 575/28オリーブ色粘土  
3-1. 575/28オリーブ色粘土  
3-2. 575/28オリーブ色粘土  
3-3. 575/28オリーブ色粘土  
4. 10YR5/4褐色粘土シルト  
5. 10YR5/4褐色粘土シルト  
6. 23Y/3褐色粘土

Scale 1/80 2m

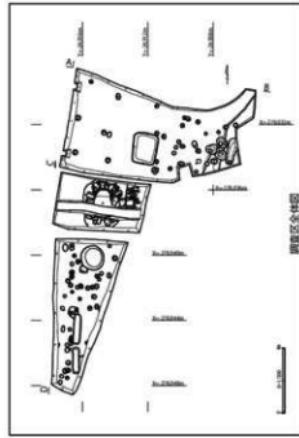


図 20 調査区断面土層図

117-118-119-120土坑

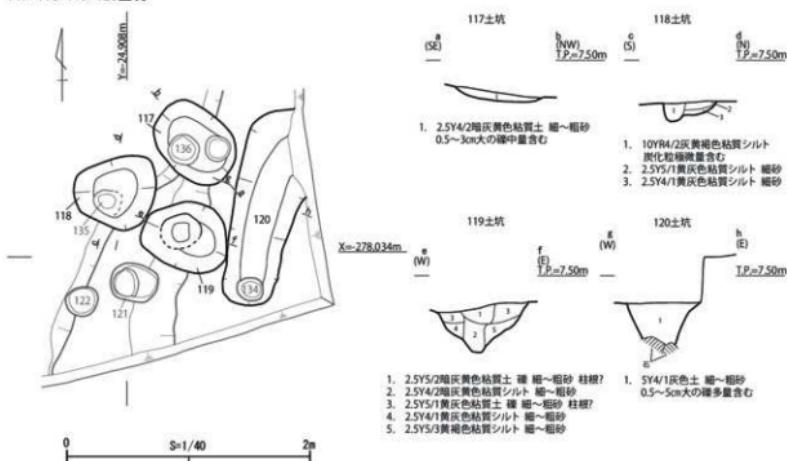


図 21 1区土坑

構 119についても規模・断面形状などから土坑と柱穴が重なっている可能性が高く、119 土坑としてここで説明する。

117 土坑は 125・136 柱穴と重複し、それより古い。平面形状は楕円形で、規模は長さ 0.73 m、幅 0.54 m、深さ 0.10 m である。断面形状は浅い船底状で、埋土は 2.5Y4/2 暗灰色粘質土である。

118 土坑は 135 柱穴と重複し、それより古い。平面形状は不整形で、長さ 0.66 m、幅 0.60 m、深さ 0.17 m である。断面形状は船底状を呈し、埋土は 2.5Y4/1 ~ 5/1 黄灰色粘質土である。

119 土坑は中央付近で柱穴と重複し、それより古い。平面形状は楕円形で、規模は長さ 0.71 m、幅 0.57 m、深さ 0.36 m である。断面形状は播鉢状で、埋土は 2.5Y5/1 黄灰色粘質土、2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト、2.5Y5/3 黄褐色粘質シルトに分かれる。遺物は土師器鍋・瓦質土器釜が出土しているが柱穴部分であり、土坑本来の遺物ではない。

120 土坑は 1 区の南東隅で検出し、一部が調査区域外となる。平面形状は長楕円形で、規模は長さ 1.65 m、幅 0.57 m である。断面形状は播鉢状で、埋土は 5Y4/1 灰色粘質シルトである。

**柱穴群 1** 1 区東で約 30 個からなる柱穴群を検出しており、周辺にさらに展開していた可能性が高い。大部分の柱穴で柱痕を確認し、柱穴の数や配置状況からも複数の建物が重複して存在した可能性もあるが、調査区内では明確な柱並びを見出すことができおらず、調査時の報告を基に柱穴群としている。柱穴の形状は円形ないし楕円形を呈し、規模は径 0.20 ~ 0.38 m で、深さは 0.05 ~ 0.39 m で、柱痕の径は 15 ~ 23 cm と一様ではない。

このうち、116 柱穴は円形で、径 0.28 m、深さ 0.25 m で、柱痕の径は約 20 cm である。埋土は柱痕が 2.5Y4/3 褐色疊混じり粘質シルト、掘方が 2.5Y5/3 黄褐色疊混じり粘質シルトである。

128 柱穴は円形で、径 0.25 m、深さ 0.11 m で、柱痕の径は 15 cm である。埋土は柱痕が 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混じり粘質土、掘方が 2.5YR5/3 黄褐色粗砂混じり粘質土である。124 柱穴は楕円形で径 0.20 ~ 0.25 m、深さ 0.12 m で、柱痕の径は 16 cm である。埋土は柱痕が 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂混じり粘質シルトで、掘方が 2.5Y4/3 暗灰黄色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は 132 柱穴から土師器鍋が出土している。

**柱穴群 2** 1 区西端で 7 基の柱穴を検出し、そのうち 6 基の柱穴で柱痕を確認している。東側を除く 3 方向への展開も予想でき、いびつな形状の掘立柱建物を想定することも可能であるが、調査時の報告を基に柱穴群とする。柱穴の形状は円形ないし楕円形を呈し、規模は径 0.25 ~ 0.37 m、深さはすべて 0.10 m 未満で、柱痕の径は 15 ~ 25 cm と一様ではない。

主な柱穴の詳細としては、101 柱穴は楕円形で径 0.30 ~ 0.33 m、深さ 0.05 m で、柱痕の径は 18 cm である。101 ~ 103 柱穴の埋土は、柱痕が 2.5Y5/3 黄褐色粗～細砂混じり土、掘方が 10YR5/3 にぶい黄褐色礫混じり粘質シルトである。104 柱穴は楕円形で径 0.28 ~ 0.30 m、深さ 0.08 m で、柱痕の径は 20 cm である。埋土は柱痕 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂～細砂混じり土、掘方 2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり粘質シルトである。遺物は 105 柱穴から土師器鍋片が出土するのみである。

## 2 区（写真図版 11）

町道部分にあたることから、南・北側を道路擁壁に囲まれた狭小範囲の調査となっている。

第 3 層砂礫層下の、第 5 層上面（T.P. = +7.0 m）で石積井戸、石列を確認した。2 区は第 4 層が存在しないことから、遺構の掘削面は層位的には判断できないものの、遺物内容から本来は第 4 層上面の遺構であった可能性が高い。

**201 井戸**（図 22・24、写真図版 11・12・13）2 区中央部で検出した石積井戸である。掘方は全体を検出していないが楕円形を呈すると考えられ、規模は長軸 3.00 m 以上、短軸約 2.70 m である。井側の平面形は楕円形で、規模は内径で長軸（南北）1.60 m、短軸（東西）1.10 m である。井側は角礫や割石を基本的に小口積みし、上方の石材が 45 ~ 60 cm 大、下方が 20 ~ 30 cm と下位に行くほど小さくなっている。現行の水道管の下方で検出したため南側は掘削できず、水道管の養生のため井側内の深さ 0.9 m 以上の掘削はおこなっていない。ただ、南側の石積みの一部が検出できたことから、平面規模・形状を判断している。埋土は掘方が 2.5Y5/2 黄灰色礫混じり土、井側内が 2.5Y5/1 黄灰色礫混じり土が 10 ~ 20 cm の多量の礫とともに一気に埋め戻された状況が確認できた。遺物は井側内上層から唐津焼鉢（5）、瀬戸美濃系皿（4）、備前焼甕（6）、土師器釜（3）などが出土している。これらは 16 世紀後半から 17 世紀中頃のもので、井戸は近世前半代に埋め戻されたと考えられる。また、検出面の石積みが一様な高さで揃っていないことからも上端の石積みは失われたものと判断できる。

**202 石列**（図 22・24、写真図版 13）2 区東端で 201 井戸の東に近接して検出した 10 ~ 50 cm 大の角礫や割石を並べた石列で、南北方向に伸びる。南側は水道管の下となり、北側は道路擁壁によって破壊されている可能性もあるが、調査区内で長さ 1.20 m を確認している。201 井戸の検出面より一段高く、その段差は 0.18 m で、石積井戸に伴うものか明らかでない。石列の検出時に瓦質土器羽釜（10）、備前焼甕（15）、瀬戸美濃系陶器折縁深皿（14）が出土している。

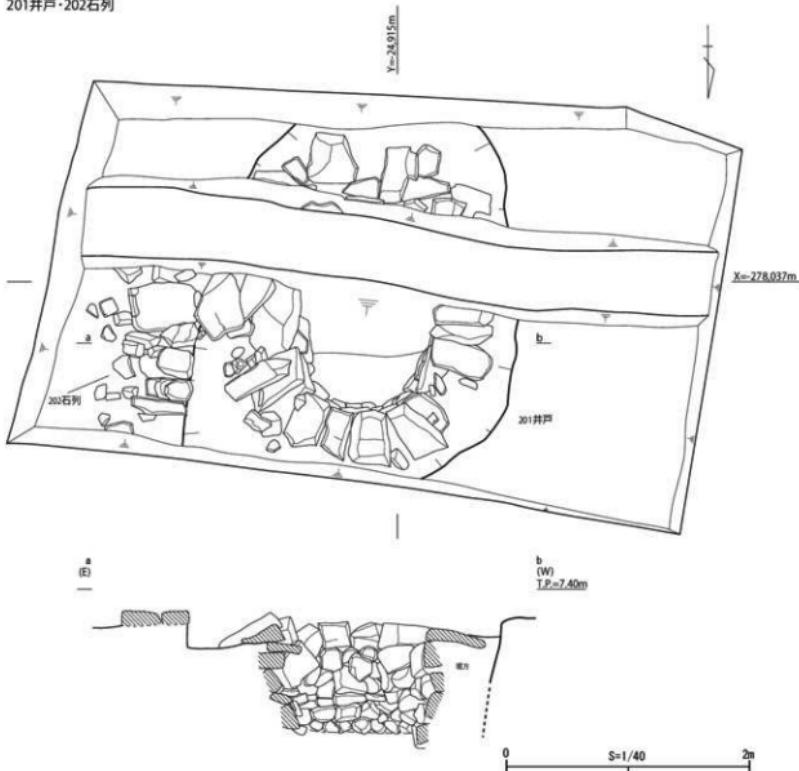


図 22 2区井戸・石列

## 3区（写真図版12）

第4層直下の第5層上面（T.P. = +7.0 m）で埋桶、土坑、柱穴、小穴を検出した。柱穴は約50基検出しているが、配置状況から北側の一群（柱穴群3）と南側の一群（柱穴群4）に分かれる。

**302 埋桶**（図23） 3区の北端付近で検出した。309土坑と重複し、それより新しい。掘方の形状は梢円形で、長さ1.50m、幅1.40m、深さ0.15mである。桶の痕跡はやや梢円形を呈し、径1.00～1.14mである。桶内には2～5cm大の礫が多量に入っていた。遺物は近世の陶器が出土しており、5層上面で検出しているものの、本来は上面の遺構であったと判断できる。

**309 土坑**（図23） 302埋桶と重複し、それより古い。平面形状は隅丸方形で、規模は長さ0.48m、幅0.42m、深さ0.10mである。断面形状は船底状で、埋土は5Y4/1灰色砂質土である。

**柱穴群3**（図24、写真図版12・13） 3区北側で検出した柱穴群で約30基からなり、検出状況からさらに周辺に展開していたと考えられる。柱穴は重複あるいは近接して位置し、数棟以上

### 302埋構・309土坑

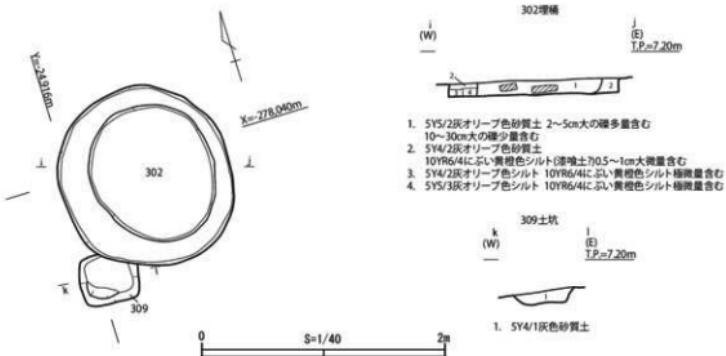


図 23 3区埋構・土坑

の建物が数時期にわたって存在していた可能性があるが、調査区が狭小であることから建物としての柱並びは想定できていない。平面形状は円形もしくは楕円形で、規模は0.15~0.30mで、深さ0.02~0.27mである。柱痕が確認できたのは約10基で、径は15~20cmである。

柱穴のうち308柱穴は楕円形を呈し、規模は長さ0.25m、幅0.20m、深さ0.18m、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色粘質土である。314柱穴は楕円形を呈し、規模は長さ0.30m、幅0.26m、深さ0.13mで、柱痕の径は18cmである。掘方の埋土は2.5Y5/2暗灰黄色粗~細砂混じり粘質土である。315柱穴は楕円形を呈し、規模は長さ0.26m、幅0.23m、深さ0.09mで、柱痕は10~15cmである。掘方の埋土は2.5Y5/2暗灰黄色粗砂~小礫混じり粘質シルトで、山茶碗(1)が出土した。317柱穴は円形を呈し、規模は径0.26~0.28m、深さ0.18mで、柱痕の径は20cmである。掘方の埋土は2.5Y5/2暗灰黄色礫混じり粘質土である。323柱穴は円形を呈し、規模は0.24~0.25m、深さ0.09mで、柱痕の径は15cmである。掘方の埋土は2.5Y5/3黄褐色粗砂~小礫混じり粘質シルトで埋土から瓦質土器擂鉢(2)が出土した。

**柱穴群4** 3区南側で柱穴を検出した柱穴群で約20基からなる。検出した付近の調査区は狭小で、南北方向の柱並びを検出した程度である。周辺に広く展開していたと考えられるものの建物を想定するに至っていない。また、柱穴は、重複あるいは近接して位置することから数棟以上の建物が数時期にわたって存在していた可能性がある。柱穴の平面形状は円形もしくは楕円形で、規模は0.15~0.30mで、深さ0.02~0.27mである。柱痕が確認できたのは約10基で、径は15~20cmである。

これらのうち、338柱穴は円形を呈し、規模は径0.22~0.24m、深さ0.17mの円形で、埋土は2.5Y5/2暗灰黄色礫混じり粘質土である。340柱穴は円形を呈し、規模は径0.27m、深さ0.18mで、柱痕は径20cmである。埋土は掘方が2.5Y5/2暗灰黄色礫混じり粘質土で、柱痕が2.5Y4/2暗灰黄色礫混じり粘質土である。

### 3. 出土遺物 (図 24、写真図版 13)

出土遺物は遺物収納コンテナに1箱である。土器類のほか土錐(16)、フイゴ羽口(17)や砥石(18)などが出土し、生活の一端を窺うことができる。

土器類で最も古く位置付けられるのは山茶碗(1)や割花文を施した中国製青磁碗(19)で、これらは13世紀前半に位置づけられる。南伊勢の土師器鍋(7)や中国製青磁縞蓮弁文(20)がこれに続き13世紀中頃から後半で、少なくとも鎌倉時代からの生活の痕跡を見いだすことができる。遺物で時代的に最も多いのは、14～15世紀代のもので、数多く検出している柱穴もほとんどがこの時期に帰属するものと考えられる。戦国時代後半となる16世紀の遺物は出土していないが、201井戸からは16世紀末頃から17世紀中頃の遺物が出土しており、江戸時代の中頃までは生活の場であり、その後は水田となったものと考えられる。

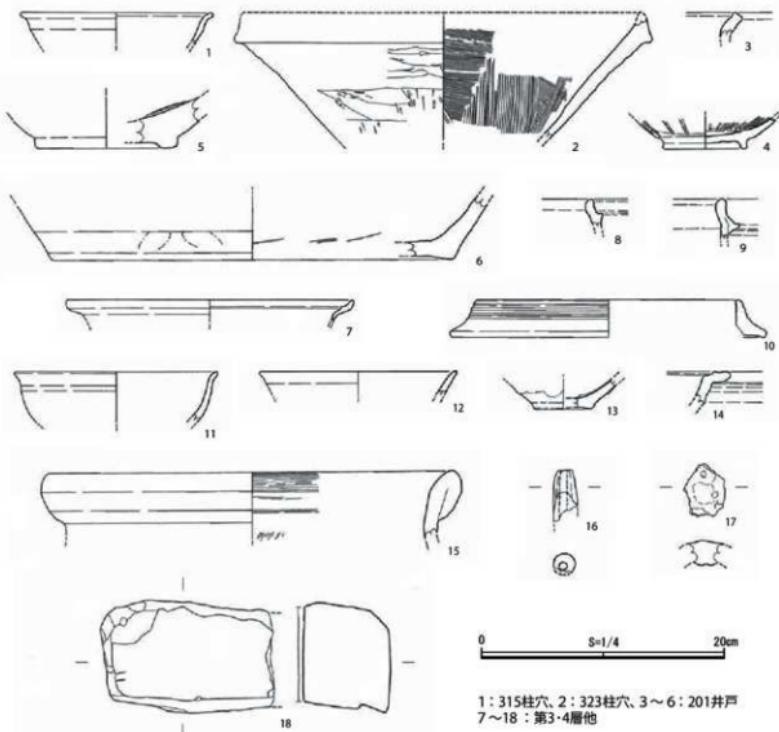


図 12 出土遺物

## 第5節　まとめ

結城城跡は、山頂部のみを遺跡範囲としていたが、すさみ串本道路建設に伴う確認調査で、その麓でも遺構や遺物が見つかったことで、山頂部から麓までを遺跡範囲としている。立地からは、山頂部、南西低丘陵部、平地部に大きく分けることができる。山頂部は旧来の山城部分で、南西低丘陵部は山城の一部である可能性もある箇所、平地部は集落が想定できる箇所となる。

**山頂部** 山城部分の発掘調査は、これまで行われたことがないが、和歌山城郭調査研究会の踏査などによって縄張り図が提示され、城の評価などが行われている。城跡の縄張りは、標高88mの山頂部に主郭となる曲輪Iを置き、その南側に曲輪IIを、さらに少しづつ下って曲輪IIIを配している。また、曲輪IIIから東斜面さらに曲輪Iの北にかけて腰曲輪が取り付いている。尾根続きとなる北東側には3条の堀切を、南東側に下る尾根筋にも堀切を開削して城の内外を区画し、比較的緩斜面となる東斜面には連続する2本の堅堀を掘削している。

曲輪Iは最も広い面積をもち、周囲の切岸は明確なものの平坦部の造成は甘く、羊歯が生い茂っていることで明確な構造は掴めない。曲輪IIは曲輪Iと接する北側以外の3方向に低い土塁を巡らし、更に南側のみに一段高い土塁を構築する。曲輪Iと曲輪IIは低い土塁から接続される斜路によって繋がっている。曲輪IIはほぼ平坦な長さ・幅10m余りの方形を呈する空間で、おそらく兵の駐屯あるいは居住スペースであったことが想定できる。また、曲輪IIの南にもやや造成が甘いものの土塁に接して小曲輪が存在する。西斜面は急峻で敵の侵攻を想定していないが、比較的緩斜面となる南・東方向には曲輪III及び腰曲輪IVを置き、この方面の守備としている。実際、

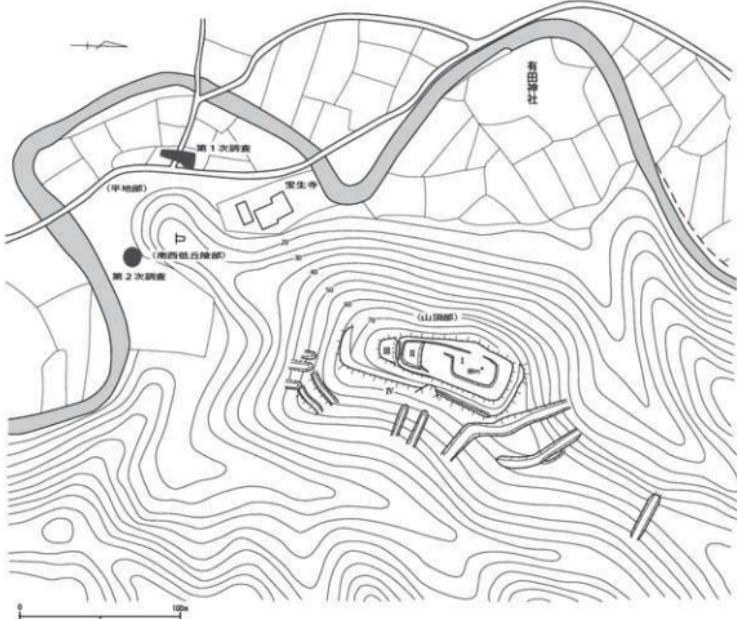


図25 結城城跡縄張り図

曲輪Ⅲには投弾用と考えられる川原石が散乱しており、腰曲輪Ⅳは東斜面の北側で外側に土塁を持って横堀としている。腰曲輪Ⅳについては東斜面の中ほどで途切れしており、その下方に堅堀が存在することになる。曲輪が途切れている理由としては、防御的な性格であるとの判断できるが、やや等高線が内側に窪む位置で小さな谷頭に相当することからも、崩落であると考えたい。

北東側の堀切の内、もっとも内側のものは規模も大きく、両端が堅堀となって斜面を下っている。この堀切の特徴は東斜面で腰曲輪Ⅳに沿うように横堀状に一旦斜めに下った後に谷方向に落ちている。真ん中の堀切は、西斜面が堅堀となって下るが、東斜面では内側の堀切と同じように斜面を斜めに下り小規模な小曲輪となって終わっている。最も外側の堀切は、急斜面である西斜面は掘削せず、尾根筋から始まって東斜面を堅堀となって下っている。

南東側に下る尾根筋の堀切は、北東側の堀切に比して小規模で、下方の堀切については明確ではないが、どちらも南斜面で堅堀と接続する可能性が高い。これらの堀切は南東側尾根筋の防御を意識したものであるが、城への登城ルートを想定した場合、西斜面以外では南東側尾根筋を登るのが最も容易であることからも、この方面に虎口が存在し、曲輪Ⅲ・曲輪Ⅱを経て曲輪Ⅰに至ったと考えられる。

城跡からは遺物は採集できず、城の時期は明らかでないが、横堀の存在から戦国時代後期築城、あるいはその時期に改修されたとの評価もある。

**南西低丘陵部** 南西低丘陵部は嘴状に突出しており、現在は宝生寺の墓地となっている。ここにも小規模な曲輪が存在した可能性があり、先端部は墓造成時の掘り残しの可能性もあるが土壘上の高まりが残る。また一画には中世に遡る宝篋印塔などの石塔類も置かれている。

**平地部** 発掘調査を実施したのは南西低丘陵部の平地部で、調査では中世から近世初頭の遺物が出土しているが、16世紀前～後半代の遺物は欠失する。調査成果から第5遺構面の遺構が13～15世紀（主に14・15世紀か？）で、その上に氾濫堆積（第4層）が確認される。これは遺跡の途絶を物語るもので、16世紀代前～後半代の遺物の欠失と連動している可能性もある。遺跡が再び活動を始めるのは16世紀末頃であると考えられ、17世紀中頃まで生活の痕跡が見いだせ、その後再び氾濫堆積（第3層）があり、周辺は水田へと推移する。

出土した遺物には中国製青磁・白磁などが一定量あり、平地部で生活していたのが領主など比較的上層階級であった可能性があるが、平地部で出土した遺物の時期が、そのまま山城の時期と



写真7 結城城跡の堀切



写真8 南西低丘陵部の石塔類

するには早計であるかもしれない。ただ、里野中山城跡をはじめ、和歌山県南部の城跡が近世初頭まで維持されることと平地部で17世紀初頭の遺物が出土していることは、あながち結城城跡の継続・廃絶時期を窺う事柄であるかもしれない。また、平野部を流れる有田川は、有田神社の上で山際に接し、南西低丘陵部を迂回して第2次発掘調査区の東で再び山際に接している。山城の裾に周囲から隔絶した平地部を形成し、その中に神社や寺が位置することになる。城への登城ルートがこの隔絶した平地部の一画で第2次調査区の東から伸びると想定できることからも、山城と平地部の集落は全期間でないにしろ連動している可能性があり、平地部に領主や一族の屋敷地も存在した可能性がある。



写真9 有田神社

表3 結城城跡第1次出土遺物観察表

法規の( )内は削除した大きさ → はそれ以上。色調の内・外・無は「面」を省略している。

順位 番号	種類 器種	地区	遺構 部位	法規 面積 m <sup>2</sup>		現存率	技法・調整	色調	地 土	備 考	
				(1)	(2)						
1	石垣 網	3区	305	05.4	24m <sup>2</sup>	-	石垣 内側面削除ナメ	白抹粧付近白軸 5%	内側削除付近白軸 内側削除ナメ	無	瓦転覆元 1SC
2	瓦質土器 鋤	3区	323	05.0	-	0.010	-	10%	内面ヨコ方向ハトの跡目 外側ヨコ・ナメ	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2	無 2mm以下の中灰 白軸砂粒を少量含む
3	土器留 塗	2区	201	02.0	-	20+	石垣面 内側削除ナメ	無 11.7	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 15mm以下の赤 色化程度を多量に含む	被覆のみ
4	廻口丸蓋 筒器 筒耳	2区	201	02.0	-	2.6+	底面 底面	無軸 外軸部器胎	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	2.5mmの赤鉄色 1.5mmの赤鉄色	瓦転覆元 1SC 中灰
5	漆器盤 鉢	2区	201	02.0	-	22+	内・N2・S2・W2・E2 底面 底面	白面土見付 内面灰軸 黑船 軸上付	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	1.5mmの黒色・白 色の粒を微量含む	瓦転覆元 1SC 相 同
6	廻口丸蓋	2区	201	02.0	-	5.2+	内・N2・S2・W2・E2 内側削除ナメ	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 5mm以下の白 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 1SC ~17C
7	土器留 塗	1区	第3層	-	1.6+	-	石垣面 内側削除ナメ	無 5%	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 10mm以下の赤 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 由伊 1SC 中灰
8	土器留 塗	1区	第4層上 部	-	2.4+	-	石垣面 内側削除ナメ	無 33.7	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 1mm以下の赤 色化程度を多量に含む	被覆のみ 被覆型 1SC 塗装
9	土器留 網	1区	第2層	-	33+	-	内・N2・S2・W2・E2 内側削除ナメ	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 2mm以下の白色 砂粒を少量含む	被覆のみ 被覆型 1SC 塗装
10	瓦質土器 鋤	2区	第4層	G1.0	21+	-	内・N2・S2・W2・E2 底面から上部は直立 口縁部外側曲面凹凸 縁は側面方に 内・外側削除ナメ+ナメ	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 1mm以下の白色 砂粒を少量含む	瓦転覆元 1SC ~15C 202石井沢中央
11	中国製瓦 筒	3区	第1~3 層	G6.21	42+	-	内・N2・S2・W2・E2 無	-	無	無	瓦転覆元 1SC
12	中国製瓦 筒	1区	第3層	06.0	20+	-	内・N2・S2・W2・E2 無	-	無	瓦転覆元 1SC	
13	廻口丸蓋 筒器 瓦質瓦	1区	第3層	-	25+	16.0	底面 底面	22% 外軸部器胎 回転ヘラケツリ	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 12mmの黒 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 1SC 傷手
14	廻口丸蓋 筒器	2区	第4層	-	29+	-	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 25mmの黒 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 1SC 傷手 202石井沢中央
15	廻口丸蓋 筒	2区	第4層	G3.0	5.0+	-	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 15mm以下の黒 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 1SC 傷手 202石井沢中央
16	土製品 土器	1区	第4層上 部	底 底	42+	20+	-	40% 番状	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 10mm以下の赤 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 1SC 傷手
17	土製品 珪藻土	1区	第1~2 層	底 底	42+	13+	21+	9.6% 片断	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 10mm以下の赤 色化程度を多量に含む	瓦転覆元 1SC 傷手 202石井沢中央
18	石製品 礫石	2区	第4層	底 底	13.7	90	7.2	100% 破片 1面のみ使用 磨擦したものを再利用か?	内・N2・S2・W2・E2 内・N2・S2・W2・E2	中灰 25mmの黒 色化程度を多量に含む	-
19	中国製瓦 筒	1区	第4層	-	-	-	-	-	無	被覆のみ 被覆型 1SC 塗装	
20	中国製瓦 筒	1区	第4層	-	-	-	-	-	無	被覆のみ 被覆型 1SC 第3層手すり	

## 第4章 結城城跡の第2次発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

結城城跡における試掘確認調査は、工事に伴い橋脚が設置される範囲を対象に平成30年度に実施し、その結果、埋蔵文化財包蔵地として周知されていた丘陵部分の東西の平坦地においても、中世以前の埋蔵文化財が展開していることを確認し、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行った（和歌山県教育委員会2020『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成30年度』）。そのため、すさみ串本道路建設事業に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について、事業に先立ち、記録保存目的の発掘調査を実施することになった。結城城跡については、丘陵の西側に設置される橋脚部分の用地買収が先行して完了したことから、第1次調査として文化財センターによる発掘調査が令和元年度に実施された。第1次調査の結果については、第3章において報告するとおりであり、城館が所在する丘陵の西麓において中世前半から近世初頭にかけて集落が展開していたことが判明した。

その後、丘陵南東側の橋脚設置部分について、用地買収及び住宅撤去が完了し、発掘調査の実施が可能となったことから、令和2年6月26日付け国近整紀三工第108号で国土交通省から県教委に発掘調査の実施について依頼があり、令和2年6月30日付け文第04140003号の7で県教委が調査を受託し実施することとなった。発掘調査は、令和2年10月27日から令和2年11月11日にかけて実施し、調査面積は180.98m<sup>2</sup>である。調査の実施にあたっては、国土交通省と文化財センター間で支援業務委託契約を締結することにより、重機及び作業員の提供を受けて実施した。以下、調査結果について報告するが、調査地における地理的環境及び歴史的環境については、第3章において記述したとおりである。



図26 調査区の位置

## 第2節 調査の方法

### 1. 調査の方法 (図27)

調査対象範囲は、橋脚設置及び里道の付け替えに伴って影響を受ける範囲であり、調査区の形状は不整形である。調査実施前の現況は、東西に通る里道をはさんで北側に宅地、南側に田圃が広がっており、南側を有田川が流れている。住宅地と里道、田圃部分はそれぞれ比高差があり、丘陵に近い住宅地が最も高い場所にある。そのため、重機進入経路の制約も勘案し、コンクリートが敷設されている里道より北側の範囲を北区、里道を含む南半部を南区として工区を区分し、北区から順次調査に着手した。

掘削は、遺構面の上面 10 cmまでを重機掘削により実施し、その後、人力により遺物包含層及び遺構面の掘削を行った。検出した遺構及び調査区壁面については写真撮影及び実測図作成を行った。また、写真撮影は、フルサイズデジタルカメラにて行い、実測図は、縮尺 20 分の 1 の平面図及び断面図を作成した。なお、基準点は、3 級基準点である 3-26-4 及び第1次調査で設置した4級基準点を用いた。

### 2. 基本層序

基本層序は次の4つの層に大別し、枝番により細分した。細分層は、工区間において対応しない。  
第0層：現代造成土。

第1層：近世後半～近現代の堆積層。

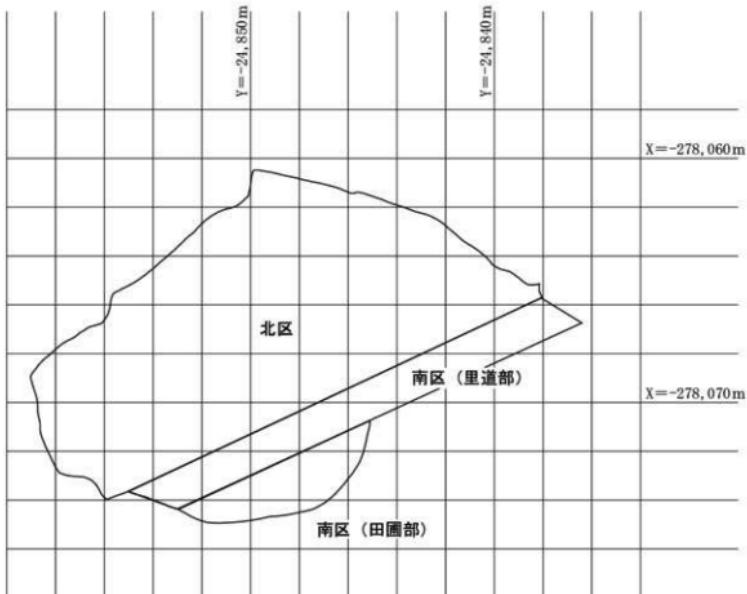


図 27 調査区区割り図

第2層：にぶい黄褐色～褐色を呈するシルト層で、径5cmの礫を多量に含む。中世後半から近世前半にかけての生活面。

第3層：にぶい黄褐色～褐色を呈するシルト層からなり、径1～5cmの礫を多く含む。中世前半の生活面。

### 第3節 調査の結果

#### 1. 検出した遺構（図28～31、写真図版14～16）

まず、北区において機械により住宅地の造成土である第0層の掘削を進めながら、北区と南区（里道）との間に設置されていたコンクリート擁壁を撤去したところ、北区及び里道部分の遺構面まで攪乱が及んでおらず、遺構面が残存していることが分かった。北区において、包含層である第1層を人力により掘削しながら、第2層の上面で遺構の検出を行った結果、調査範囲の西側を中心に浄化槽などによる現代の攪乱が複数見られたが、全面においてピット及び土坑を検出し、調査範囲の南東部分においては、直角に折れ曲がる石列を検出した。出土遺物は、中世後半から近世にかけての陶器器の破片が出土した。攪乱土坑の壁面の精査の結果、丘陵により近い北区においては、遺構面が1面であることが分かった。また、調査地の北側では、丘陵裾部の岩盤がみられ、第2層には岩盤に由来する礫が多数含まれていることから、岩盤上部に堆積した丘陵からの流水がベースとなっていると考えられる。

その後、南区の調査に着手した。里道部分については、コンクリートの路面を撤去し、第2層の上面で遺構の検出を行った結果、西側において、等間隔に並ぶピットを確認した。里道より南側の田圃部分では、里道の擁壁により調査地の北側が攪乱されていたものの、それ以外の範囲は遺構面が残存していた。試掘確認調査の結果から、中世後半と前半の遺構面があることが推察されたため、まず、第2層上面で遺構の検出を行った。その結果、中世後半の土器を含む土坑やピットを複数検出し、ピットが密に並んでいる状況が確認された。その後、第2層上面の記録作成を行ったのち、掘り下げを行い、第3層上面で遺構の検出を行った。その結果、青磁や瓦器など、中世前半の遺物を含む土坑及びピットを検出した。記録作成作業を完了したのち、北区から順次埋め戻しを機械により実施し、埋め戻しを完了した。以下、検出した遺構の詳細について、北区と南区に分けて記載する。

##### ①北区の遺構

**土坑・ピット** 土坑は多くのものが長径0.40m程度のものが多く、遺構4・11・14・28はそれよりも大きい。ただし、遺構4は大部分が攪乱土坑により大部分が破壊されていた。

遺構1・2は、調査区の西端部で検出した土坑またはピット状の遺構であり、東西方向に並んでいる。

遺構7・8・10は、東西方向に等間隔に並んでおり、それぞれの芯々間の距離は1.70mである。特に、遺構7には埋土に炭化物を含んでいることから、建物または柵が建っていた可能性がある。

遺構17・18・19・20は、2基ずつ南北方向に近接して設けられている。南側の石列の内側に存在することから、石列内に所在する建物を構成した遺構の可能性がある。

第1章構面平面圖

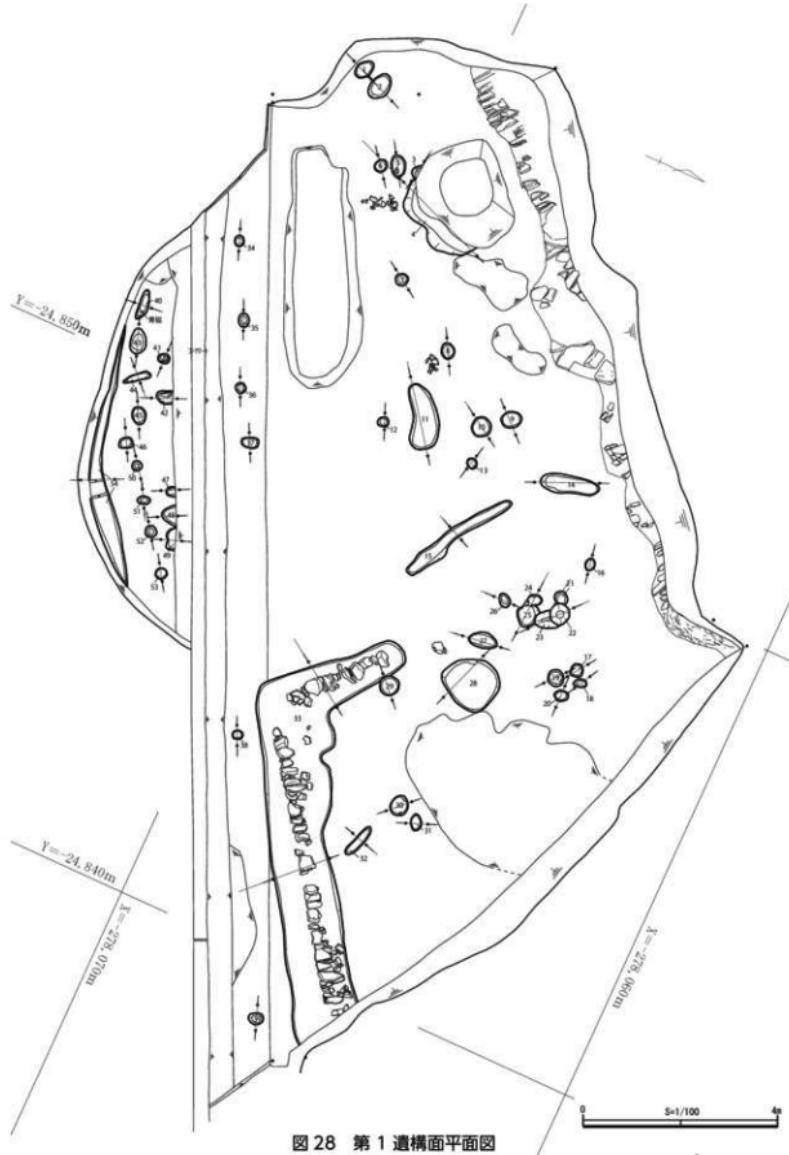
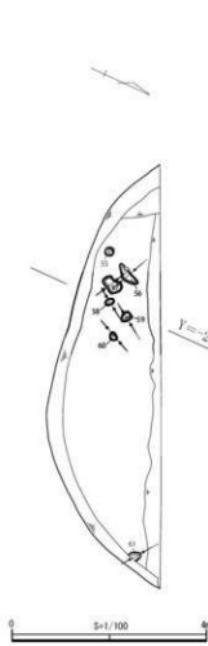
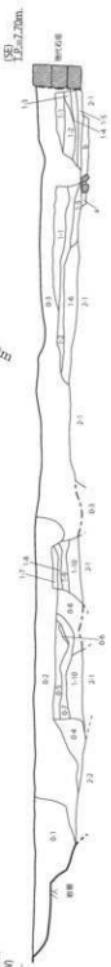


図28 第1遺構面平面図

第2造構面平面図



北区 東壁 土層断面図  
(NW)

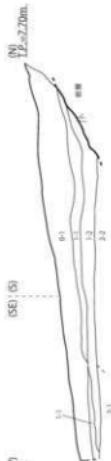


- 0.1. 10Y86/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む(西壁)
- 0.2. 10Y87/1 及日石岩質
- 0.3. 10Y85/3 に、  
残基岩質シルト φ10~20cmの砂多く含む(西壁)
- 0.4. 10Y86/3 に、  
残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む(西壁)
- 0.5. 10Y84/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む(西壁)
- 0.6. 10Y86/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む(西壁)
- 0.7. 2.5Y73/3 残基岩質シルト 砂を含まない
- 0.8. 10Y86/3 に、  
残基岩質シルト 砂を含まない
- 0.9. 10Y85/3 残基岩質シルト φ10~5cmの砂多く含む
- 1.0. 10Y84/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む

- 1-1. 2.5Y63/3 に、  
残基岩質シルト φ5cmの砂少含む
- 1-2. 10Y85/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 1-3. 2.5Y52/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 1-4. 10Y86/3 に、  
残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 1-5. 10Y84/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 1-6. 10Y86/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 1-7. 10Y85/3 に、  
残基岩質シルト 砂を含まない
- 1-8. 2.5Y63/3 に、  
残基岩質シルト 砂を含まない
- 1-9. 10Y85/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 1-10. 10Y84/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む

- 2-1. 10Y84/3 に、  
残基岩質シルト φ1~5cmの砂多く含む 土壌・測量器がこのる
- 2-2. 10Y84/4 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 2-3. 7.5Y64/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- b. 10Y84/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む

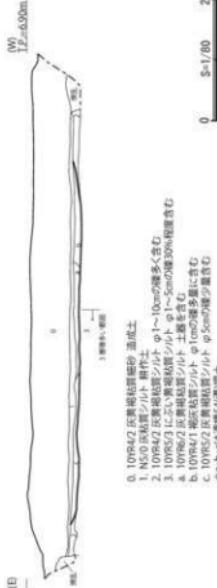
北区 西壁 土層断面図  
(NW)



- 0.1. 7.5Y63/1 残基岩質シルト φ10cm~30cmの砂多く含む C
- 0.2. 2.5Y64/2 残基岩質シルト φ10cm~30cmの砂多く含む C
- 0.3. 7.5Y64/2 残基岩質シルト φ10cm~30cmの砂多く含む C
- 0.4. 10Y84/4 に、  
残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- 0.5. 7.5Y64/4 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む

- 0.10Y84/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
  1. N50E 残基岩質シルト 砂土
  2. 10Y84/2 残基岩質シルト φ1~10cmの砂多く含む C
  3. 10Y85/1 に、  
残基岩質シルト φ1~5cmの砂 30%程度含む
  4. 10Y86/1 残基岩質シルト 土壌を含む G
  - b. 10Y86/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
  - c. 10Y85/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
  - d. 10Y85/1 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む
- a-b-c-dは測量記入用語土

南区 第2造構面 断面・邊縫隙断面図

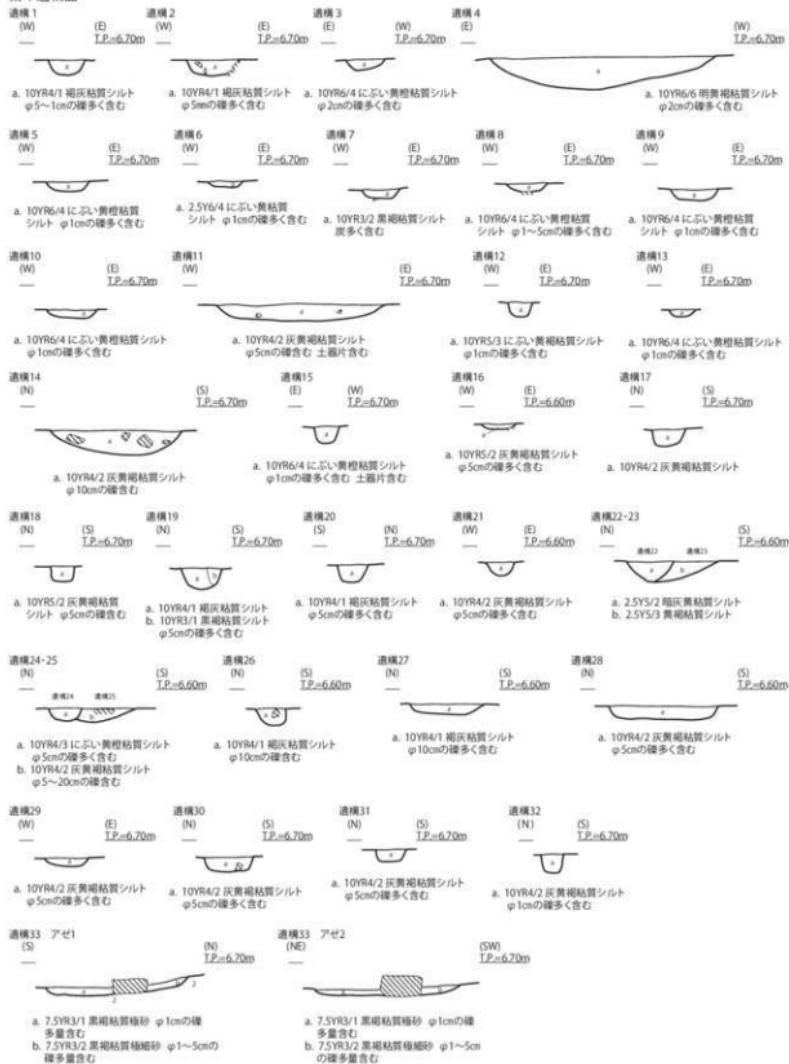


0.10Y84/2 残基岩質シルト φ10cmの砂多く含む C

a-b-c-dは測量記入用語土

図 29 第2造構面平面図及び壁面土層断面図

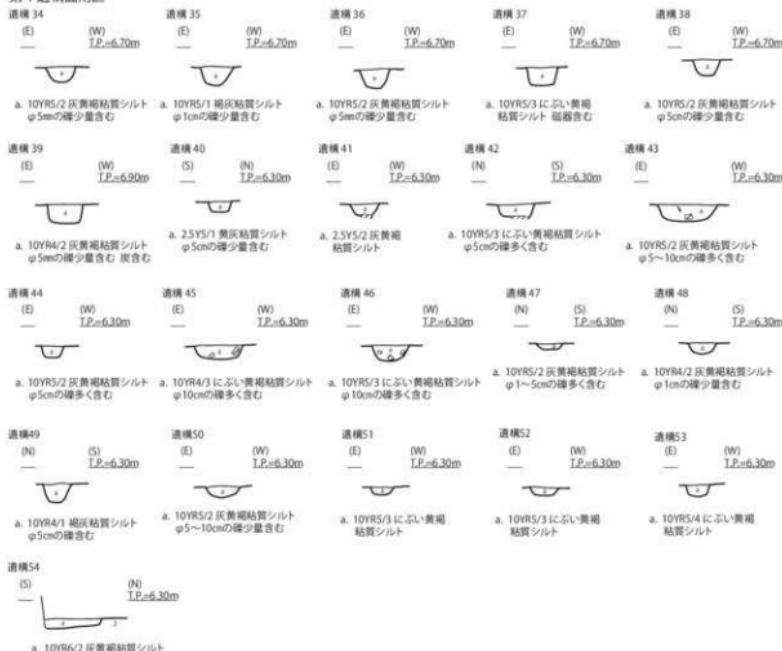
### 第1遺構面



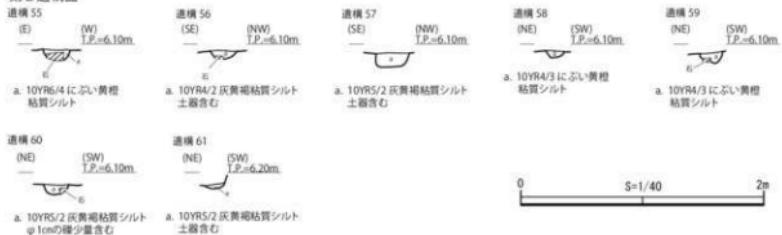
0 S=1/40 28

図 30 遺構断面図 1

### 第1 遺構面南区



### 第2 遺構面



0 S=1/40 2m

図31 遺構断面図2

これらの遺構については、北側に存在する丘陵南面の裾部のラインに沿うか、またはそれに直交するように並んでいることから、建物等の配置において丘陵裾部のラインを基準としていた可能性が高い。

**石列 遺構 33** は石列及びその掘方であり、南側において東西方向に 6.40 m 分並んでおり、西側で直角に北側に折れ曲がり、そこから北側に 2.50 m 分並んでいる状況を検出した。南辺部分はさらに東側に伸びているものと考えられる。使用している石材は角礫が主であり、径 20 cm～40 cm のものが多い。機械掘削時においては上半に相当する範囲において石垣は確認されなかつたことから、すでに過去の造成時に上半部が撤去され、第 0 層及び第 1 層が堆積したとみられる。なお、攢乱土坑や造成土に同大の角礫が多く含まれていたことから、関連性がうかがえる。東端から 0.76 m の部分から 3 石は、平面形が三角形を呈する間知石に似た礫を用いており、他の部分とは異なっている。裏込めの構造がみられないことから、土留めのための石垣ではなく、石塀のような構造物であったと考えられる。なお、この石列についても、上述のピットと同様に、丘陵裾部のラインに平行して設置されている。なお、掘方の埋土から 17 世紀代の土師器の炮烙が出土している。

**溝状遺構 遺構 15** は溝状の遺構である。長さは 2.56 m を測る。石列の遺構 33 の西辺が途切れる付近から同一の方向に伸びていることから、東側の建物に関連する遺構の可能性がある。

遺物については、多くは包含層または遺構面上からの出土であるが、中世末から近世にかけての遺物が散布していたことから、これらの遺構は当該時期に所属すると考えられる。

### ②南区（里道部）の遺構

里道部からは、西半において、東西方向に並ぶピットを 4 基検出した。東半においてもそれぞれの間隔が大きいが 2 基のピットが見られた。遺構 37 の埋土からは磁器が出土した。これらの方向は北区でみられたものとは角度が異なっている。

### ③南区（田圃部分）の遺構

**ピット群** 里道の擁壁より南側の田圃部分の調査区では、第 2 層上面及び第 3 層上面において遺構を検出した。まず、第 2 層上面では、主としてピット状の遺構を多数検出した。近接しているものが多いが、遺構 40・43・44・45、遺構 46・50・51・52・53 は方向を同じくして並んでいることから、木柵のようなものがあった可能性がある。遺構 40 からは 15 世紀中ごろの青磁片が出土した。

**溝状遺構 遺構 54** は東西に長い溝状の遺構である。埋土である a 層には常滑焼の甕の破片や鐵鏃が含まれていた。

**土坑・ピット** 第 3 層上面において、遺構 55～61 を検出した。土坑もしくはピット状の遺構であり、遺構 61 以外は調査区の西側に固まっている。第 2 面でみられたピット状遺構と方向が同一である。第 3 層上面から、東播系須恵器の捏鉢の破片が出土した。13 世紀後半ごろのものと考えられ、確認調査の結果とあわせて、第 3 層上面の遺構は中世前半と考えられる。

## 2. 出土遺物（図 32、写真図版 17）

遺物の出土点数は、全体として整理コンテナ 1 箱分であり、少量である。

1 は、土師器・炮烙の口縁部の破片であり、遺構 33 の埋土から出土した。残存高は 3.4cm である。

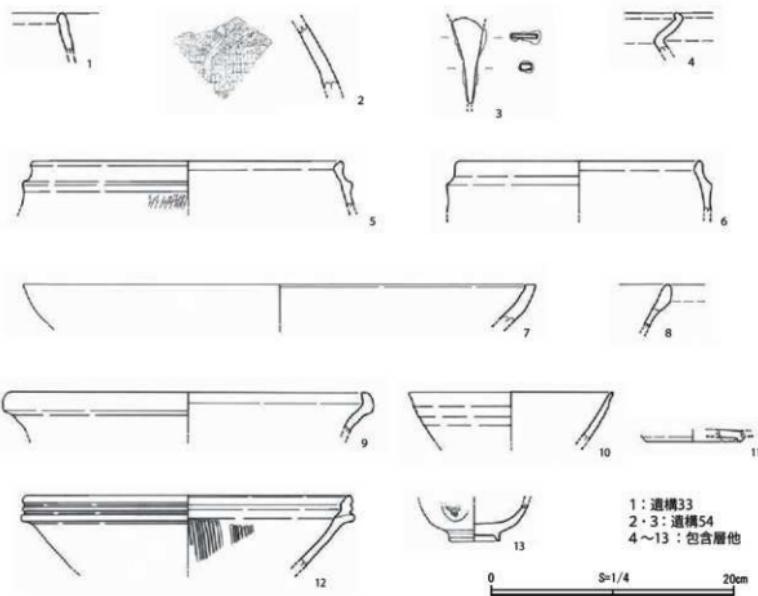


図32 出土遺物

内外面の調整はヨコナデである。17世紀代のものと考えられる。

2は、常滑焼・甕の肩部の破片である。遺構54から出土した。外面には、ナデのち、格子スタンプがみられる。内面調整はナデである。

3は、鉄錠であり、遺構54から出土した。幅7.0cm、長さ2.3cm、厚さ0.6cmである。頭部と考えられる。

4は、土師器釜の破片である。北区東半の第2層上面から出土した。口縁端部をつまみあげる。

5・6は、土師器鍋の口縁部の破片である。いずれも北区東半の第2層上面からの出土である。播磨型と考えられ、15世紀後半に属する。

7は、土師器であり、鍋の可能性がある。南区の田圃部から出土した。内外面の調整はヨコナデである。

8は、土師器鍋の口縁部の破片である。口縁部は玉縁状を呈し、内外面の調整はヨコナデである。外面には煤の付着がみられる。

9は、東播系須恵器捏鉢の口縁部である。南区の第3層上面から出土した。内外面ともに回転ナデにより調整されている。13世紀代と考えられる。

10は、瀬戸美濃系陶器の灰釉の平碗であり、第2層上面から出土した。15世紀代に属する。

11は、瀬戸美濃系陶器の皿である。灰釉がみられ、高台内面には、露胎が一部みられることから、17世紀代と考えられる。里道部分の第3層上面から出土した。

12は、備前焼の摺鉢である。第2層上面から出土した。口縁部外面に自然釉が付着する。形状から17世紀後半のものと考えられる。

13は、造成土から出土した染付の碗である。外面に圓線、丸の中に花文の印判がみられる。18世紀前半代に属する。

また、図版17の14は、中国製青磁碗である。遺構40から出土した。線描蓮弁文がみられ、15世紀代と考えられる。また、サンゴ（図版17の15）が第2層上面から出土しており、遺跡の外部から持ち込まれたものと考えられる。

#### 第4節まとめ

以上のとおり、当該調査区付近においては、中世前半から集落の形成が行われていたことが分かり、中世末から近世にかけて、丘陵裾部において、建物の建設が行われる利用がされたと考えられる。特に、第2層上面の遺構群については、掘立柱建物の柱穴や木柵の可能性が考えられるピットを検出し、それらは丘陵裾部のラインを基準とした配置となっていることから、丘陵上において城館跡が機能していた時期に、南東麓においても関連する建物等が展開していたことが明らかとなった。

表4 結城城跡第2次出土遺物観察表

法量の( )内は復元した大きさ。×はそれ以上。色調の内・外・底は「面」を省略している。

発 見 方 法 名 号	種類 器種	地区	遺構 番号	法 第40		残存率	技法・調整	色 調	加 土	備 考
				11B	底さ 直径					
1 土 器 皿	北区東西G 輪郭3D 輪郭	西区 田園地	-	24+	-	10%底 3%内壁	内外底コナデ	内:10Y35-4浅黄 外:10Y35-2灰 底:5Y37-4にぶい壁	やや粗 1m以下の中 性地盤を多量に含む	無地のみ 17C
2 茶 葉 裏	北区 田園地	-	54漢 底	53+	-	3%内壁	外底コナデ+ナダ+暗子スタンプ 内底コナデ+ナダ	内:5Y35-2にぶい系地 外:5Y35-4灰 底:5Y35-4	粗	無地のみ
3 器 皿	北区 田園地	長谷 底土	長谷 2.0+	23	0.6	60%	毛端部欠損 鉄化を有し	-	-	-
4 土 器 皿	北区東半	2層土壇	-	22+	-	10%底 5%内壁	内外底コナデ	内:25Y35-6明赤地 外:25Y35-6明赤地 底:10Y37-2にぶい 壁	1m以下の中 性地盤を含む	無地のみ
5 土 器 皿	北区東半	2層土壇	(25)	28+	-	10%底 内・外底	内外底コナデ	内:5Y35-4にぶい系地 外:5Y35-4にぶい系地 底:5Y35-4	0.5m以下の白色 地盤を複数含む	無地無元 無地無元 17C後半
6 土 器 皿	北区東半	2層土壇	(26)	42+	-	10%底 7%	内・外底	内:5Y34-1褐色 外:5Y34-1褐色 底:25Y37-2明赤地 壁:7.5Y34-1褐色	やや粗 1.5m以下の赤 色地盤を多量に含む	丸窓復元 無地復元 17C後半
7 土 器 皿?	南区 田園地	1.5番目 ①	61.4	32+	-	10%底 5%	内外底コナデ	内:25Y35-1黒(△) 外:5Y34-1褐色 底:25Y35-4にぶい系地	1.5m以下の白色 地盤を多量に含む	無地復元
8 土 器 皿	南区東道コン クリート下	南丁上	-	32+	-	10%底 3%内壁	内・外底五稜状 内:内底コナデ 外:内壁スリット	内:5Y35-8黒 外:7.5Y37-6黒	0.5m以下の灰 色地盤を含む	無地のみ 内・外底無元 17C後半
9 東屋系遺構 柱	南区 田園地	3層土壇	(27)	32+	-	10%底 20%	内・外底回転ナダ	内:5Y35-1黒 外:36.9灰 底:5Y37-6灰	1m以下の中 性地盤を含む	無地復元
10 廻り石遺構 両面 平野	北区東半	2層土壇	(16.4)	41+	-	10%底 10%	内・外底	内:23Y37-2灰 外:10Y38-1灰	粗	丸窓復元 17C
11 廻り石遺構 両面 斜面	南区東道コン クリート下	南丁上	-	10+	17.6	高台部 15%	高台内-深轟動 日影	内:25Y36-2灰 外:5Y37-1白	粗	丸窓復元 17C
12 廻り石 底	北区中央	2層土壇	(26.2)	60+	-	10%底 8%	内・外底回転ナダ	1層部外周自然地 内:10Y35-3赤 外:10Y35-1灰 底:10B5-2灰	1m以下の白色 地盤を含む	丸窓復元 17C後半
13 把頭名金冠 瓶	-	造成土中	-	20+	4.0	底部 80%	全周 80%	骨付鶴頭瓦+辯付瓦 瓦に花文の印判	内:7.5G35/1灰 外:5B53-1褐色 底:70.0灰	一部反転復元 17C前半
14 中国製青磁 碗	南区 田園地	40	底土	-	-	-	底端差	内:25G75/1オーブ灰 外:N7.0灰	写真のみ 高さ15cm	

## 第5章 浦屋敷跡の発掘調査

### 第1節 調査に至る経緯

浦屋敷跡における確認調査は、工事に伴い橋脚が設置される高石垣上の平坦面において令和元年度に実施し、近世及び弥生時代後期の埋蔵文化財の展開を確認した（和歌山県教育委員会 2021『和歌山県埋蔵文化財調査年報 令和元年度』）。そのため、すさみ串本道路建設事業に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について、事業に先立ち、記録保存目的の発掘調査を実施することになり、令和2年9月3日付け国近整紀三工第160号で国土交通省から県教委に発掘調査の実施について依頼があり、令和2年9月9日付け文第04140003号の12で県教委が受託し実施することとなった。調査は、令和3年2月3日～令和3年3月17日にかけて実施し、調査面積は176.71 m<sup>2</sup>である。調査の実施にあたっては、国土交通省と文化財センター間で支援業務委託契約を締結することにより、重機及び作業員の提供を受けて実施した。

### 第2節 遺跡周辺の環境（図33）

浦屋敷跡は、東牟婁郡串本町江田に所在し、潮岬よりも西側の紀伊半島の南端付近に位置する。太平洋に注ぐ小河川の東側、河口から約200mの位置にある丘陵上が周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。平成28年度にすさみ串本道路建設に伴って実施した事前の分布調査では、近世に遡ると考えられる高石垣と古井戸などを確認するとともに、土器や陶磁器などの遺物を採集したことから、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として認定された。『紀伊続風土記』など近世の地誌には、近世期において、浦氏一族が江田組の大庄屋を代々踏襲したことが記されており、高石垣

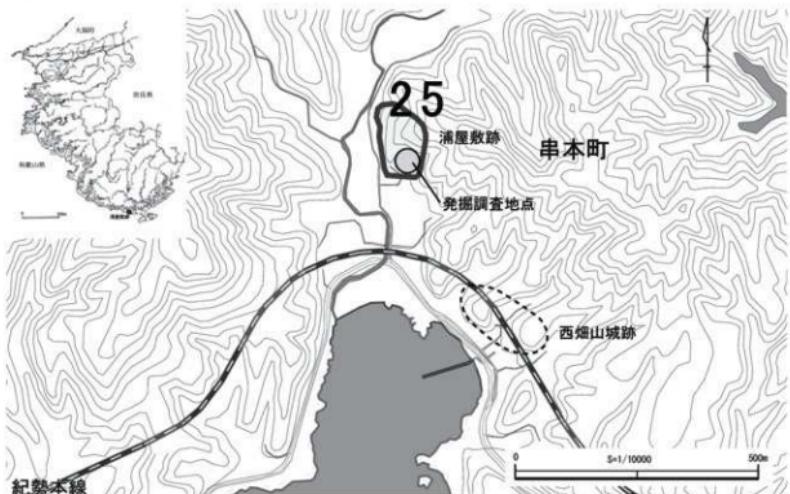


図33 遺跡の位置



写真 10 高石垣



写真 11 調査風景



写真 12 西畠山西城跡 土壘



写真 13 西畠山西城跡 堀切

は浦氏の屋敷地であったことが分かる（串本町史編纂委員会 1988『串本町史』。『牟婁風土記』（森本正男、1970 年）によると、浦氏は、鎌倉時代に尾張の浦野から当地に移住し、西畠山城を築いたことが始まりとされ、令和 3 年には、和歌山城郭調査研究会によって、浦屋敷跡の南東約 400 m の丘陵端部において、西畠山西城跡及び東城跡が見つかっており（野田理 2022「枯木灘周辺で新発見された城館跡」『和歌山城郭研究』第 21 号、和歌山城郭調査研究会）、浦屋敷跡に関連する城館であると考えられる。

### 第 3 節 調査の方法

#### 1. 調査の方法

すきみ串本道路建設事業においては、高石垣上の平坦面部分を本線が通過し、橋脚が平坦面の中央に設置される計画となっており、橋脚設置工事により影響を受ける範囲が調査範囲となっている。なお、高石垣については、事前の協議により付帯工事等によって破壊されず、現状保存が図られることになり、工事にあたっても養生を行ったうえで実施された。

掘削は、遺構面上面 10 cm までを重機掘削により実施し、その後、人力により遺物包含層及び遺構面の掘削を行った。検出された遺構及び調査区壁面については写真撮影及び実測図作成を行った。また、写真撮影は、フルサイズデジタルカメラにて行い、実測図は、S = 1/20 の平面図及び断面図を作成した。なお、基準点は、事業に伴って設置された 4 級基準点を用いた。

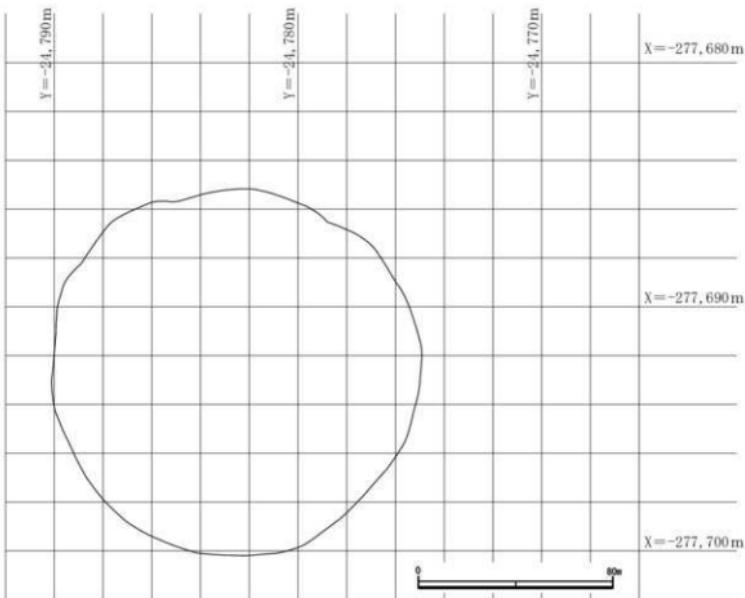


図 34 調査区の位置

## 2. 基本層序

基本層序は次の5つの層に大別し、枝番により細分した。

第0層：現代造成土。

第1層：近代初頭から現代にかけての堆積層。

第2層：にぶい黄褐色を呈する極細砂～シルト層で、径5cmの礫を多く含む。近世後半から近代にかけての堆積層。

第3層：明褐色～にぶい黄褐色を呈する極細砂～シルト層からなり、径5cmの礫を多く含む。最上面は近世の生活面である。

第4層：にぶい黄褐色を呈するシルト層であり、弥生時代後期の遺構面。

第5層：北側の丘陵から南側に向かって下がる岩盤面である。

## 第4節 発掘調査の結果

### 1. 検出した遺構（図35・36、写真図版18～21）

まず、第1遺構面の検出を行うため、機械掘削により造成土の除去を行い、第1遺構面である3-1層の上面10cmまで機械により掘削し、その後、人力により掘削しながら、遺構面の検出作業を行った。従前、当該地には住宅が2棟並んで建っていたため、全体的に現代の擾乱がみられたものの、近世期の礫石や土坑、ピットを検出した。特に、第3層は調査区の東側においては非常に硬く縮まった硬化面となっており、屋敷地の前面の建物がない部分について、漆喰などを

混ぜながら硬化面を形成したものと考えられる。西側においては、大型の礎石が並んでいる状況を検出した。第3層の上面からは近世期の陶器や貝などが散布していた。遺構検出後、平面図の作成、遺構断面図の作成、写真撮影作業等、記録作成を行った。

その後、第2遺構面の検出を行うため、第4層の上面10cmを残して機械掘削を行った。なお、第4層はゆるやかに南に下がっていることが分かり、旧地形の形状に由来すると考えられる。弥生土器の包含層である第3層を人力により掘削し、第4層の上面で人力により精査を行った結果、南側を中心にピット、土坑を複数検出した。遺物は弥生土器の高杯や甕などが多く出土した。第2遺構面についても、遺構検出後、図面作成、写真撮影を行い、壁面の断面図作成、写真撮影も行った。記録作成作業が完了したのち、機械による埋め戻しを行った。以下、主な遺構について、遺構面ごとに報告する。

#### ①第1遺構面の遺構

##### 礎石遺構 調査範囲の南西部分から、礎石と考えられる遺構を検出した。

遺構9・10・17は、礎石と考えられる。遺構9は、平坦な面を上に向けて設置されており、長軸は東西方向である。長径52cm、短径40cmである。掘方が周囲にみられ、断ち割りを行った結果、16cmの深さで埋められて設置されていることが分かった。遺構10は、丸みをもった面が上方に向いている。長径50cm、短径40cmである。長軸の向きは北東-南西方向である。掘方を掘削した結果、深さ16cm分を埋めて設置されていた。遺構17は調査区の西端中央付近で検出した。長軸は東西方向を向く。長径56cm、短径44cmである。断ち割りの結果、北側から礎が詰められており、根固め用と考えられる。深さ18cm分が埋められて設置されている。なお、これらについては、主柱用の礎石と考えられ、それらを直交方向に結んだライン上に、調査範囲内に本来は同大の礎石が他にも設置されていた可能性が考えられるが、北東部分はすでに現代の浄化槽工事により擾乱を受けている範囲にあたる。また、それらを結ぶラインの中央付近においても、平坦に加工された礎が原位置から動いた状態で見つかったことから、これらも礎石の可能性がある。なお、西側及び南側の礎石があった可能性があるが、いずれも調査範囲外に存在すると考えられ、礎石の大きさや間の距離からみて大型の建物が建っていたと考えられ、大庄屋である浦氏の屋敷がこの場所に建っていたことがうかがえる。

遺構6及び遺構16は、長径10~16cmの礎であり、礎石の可能性もあるが、遺構9・10・17と比較すると小規模である。

**通路** 第1遺構面の中央付近から南側に向かって、小ぶりの礎が並んでいる部分があり、通路であった可能性がある。また、東側の南半については、遺構面が非常に硬くしまっており、屋敷の前面部分について、小礎を多数含んだ漆喰を用いて固めていると考えられる。

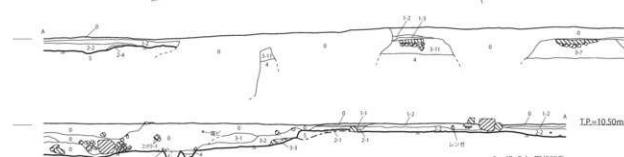
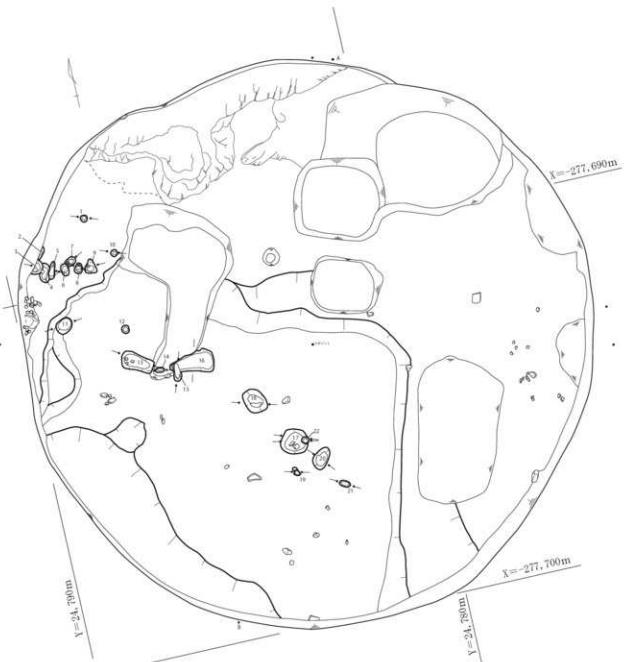
**ピット群** 調査地の北東側において、東西方向に2列に並んだピットである遺構11~14を検出した。それぞれ径が0.30m程度であり、小規模な建物が建っていた可能性がある。

#### ②第2遺構面の遺構

第2遺構面では、遺構面が北から南に向かってゆるやかに下がっており、北側では、岩盤が確認された。遺構は東側では確認されず、西側を中心に検出した。

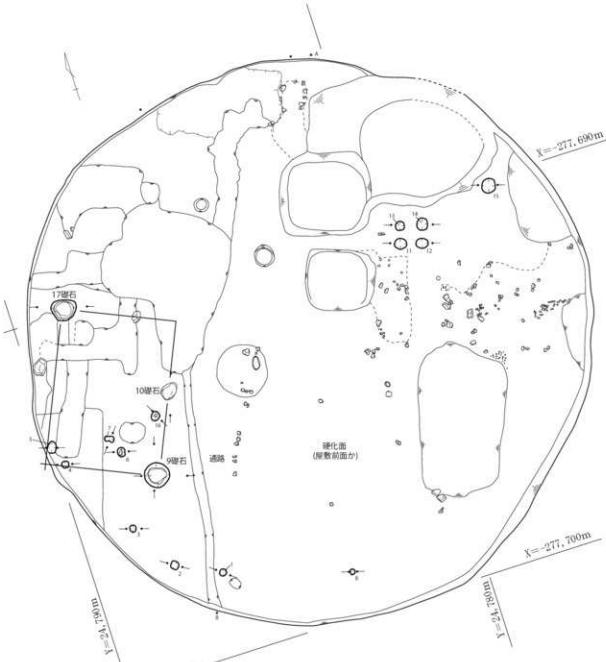
##### 土坑・ピット 遺構1~9は土坑及びピットであり、北西部に集中している一群である。

## 第2遺構面



0. 造成土 現代耕土  
1. 10YR4/2 黄褐色粘土 シルト 土器なし 種を含む しりあり  
1-2. 10YR4/1 黄褐色粘土 シルト 土器あり 種を含む しりあり  
1-3. 10YR4/1(上) 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む 現代耕土  
1-4. 10YR4/1(下) 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
2-1. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
2-2. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む  
2-3. 10YR5/3(上) 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
2-4. 10YR5/3(中) 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
2-5. 10YR5/3(下) 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-1. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-2. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-3. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-4. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-5. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-6. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-7. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-8. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-9. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-10. 10YR5/3 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-11. 10YR5/3 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり

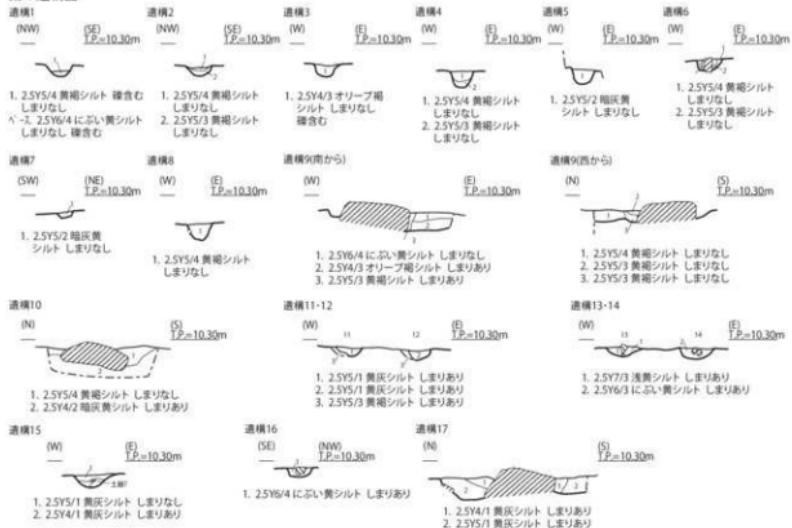
## 第1遺構面



- 3-1. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-2. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-3. 10YR5/1 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-4. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-5. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-6. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-7. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-8. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-9. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-10. 10YR5/3 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
3-11. 10YR5/3 黄褐色粘土 シルト 土器多く含む しりあり  
4. 10YR6/3 にじ 黄褐色粘土 シルト φ1~10cmの種多く含む しりあり  
5. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト φ1~5cmの種多く含む 土器含む  
6. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト φ1~5cmの種多く含む 土器含む  
b. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト φ1cmの種多く含む 土器含む  
c. 10YR5/2 黄褐色粘土 シルト φ1cmの種多く含む 土器含む

図 35 遺構平面図・土層断面図

## 第1造構面



## 第2造構面

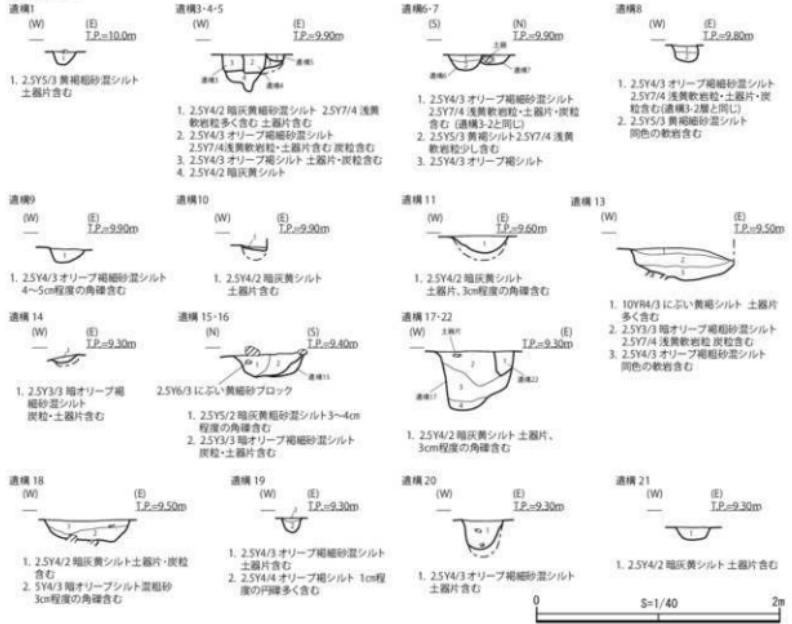


図 36 造構断面図

遺構 1・4・8 は、柱穴と考えられ、等間隔に並んでおり、掘立柱建物の可能性がある。埋土からは弥生土器が出土した。

遺構 13・16 は、不整形の土坑であり、中央付近で検出した。遺構 13 は長径 0.86 m、短径 0.40 m、遺構 16 は長径 1.16 m、短径 0.54 m を測る。

遺構 17・18・20 は、柱穴と考えられ、長径が 0.64 ~ 0.70 m を測り、他の柱穴の遺構よりも平面形状が大型である。また、北西から南東にかけて並んでいる。

出土遺物は、第 4 層上面や遺構埋土から弥生土器が多数出土し、弥生時代後期（第 V 様式）のものが多数を占め、当該時期の遺構群であると考えられる。なお、周辺の平坦地における標高と比較して約 4 ~ 5 m 高く、丘陵上の高台を利用していることが明らかとなった。

## 2. 出土遺物（図 37、写真図版 22・23）

1 ~ 24 は、弥生土器であり、大部分が包含層または第 2 遺構面の遺構埋土からの出土品である。1 は、甕であり、遺構 1 から出土した。口径 14.3 cm である。口頸部はくの字に屈曲し、大きく開く。外面体部には左下がりの平行タタキがみられる。

2 は、甕であり、遺構 3 から出土した。口径 18.7 cm である。口頸部はくの字に屈曲し、外反して開く。内外面の調整は摩滅、剥離のため不明瞭である。

3 は、甕である。遺構 4 から出土した。口径は 15.7 cm である。頸部から口縁部に向かって緩やかに外反して開く。外面体部は、左下がりの平行タタキがみられる。

4 は、壺の肩部である。遺構 7 から出土した。体部外面にはタテ方向ヘラミガキがみられ、内面には粘土の接合痕が明瞭に確認できる。

5 は、広口壺の口縁部である。遺構 11 から出土した。口径 18.7 cm である。口縁端部は上下に拡張し、端面に円形浮文が付される。

6 は、広口壺の口縁部である。遺構 17 から出土した。口径 19.6 cm を測り、強く外反する。端部は面をもち、外面にはヘラミガキがみられる。

7 は、大型甕の口縁部から肩部にかけての破片である。遺構 17 から出土した。口径 27.8 cm であり、口縁部は緩やかに屈曲して伸びる。体部外面には横方向の平行タタキがみられ、口縁部の内面にはヨコハケが施される。

8 は、大型粗製鉢の頸部から体部にかけての破片である。遺構 17 から出土した。口頸部はわずかに外反 口縁部は内湾気味に上方に伸びる。体部外面にはやや左下がりの平行タタキが確認できる。

9 は、壺の底部である。遺構 17 から出土した。底の径は 4.6 cm を測る。外面にヨコナデが確認できる。

10 は、甕の口縁部から肩部にかけての破片である。遺構 18 から出土した。口径は 18.2 cm である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して開き、体部外面には左下がりの平行タタキがみられる。口縁部はナデ調整である。

11 は、甕である。遺構 18 から出土した。口径は 20.1 cm である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、体部外面には左下がりの平行タタキがみられ、口頸部内面にはユビオサエが確認できる。

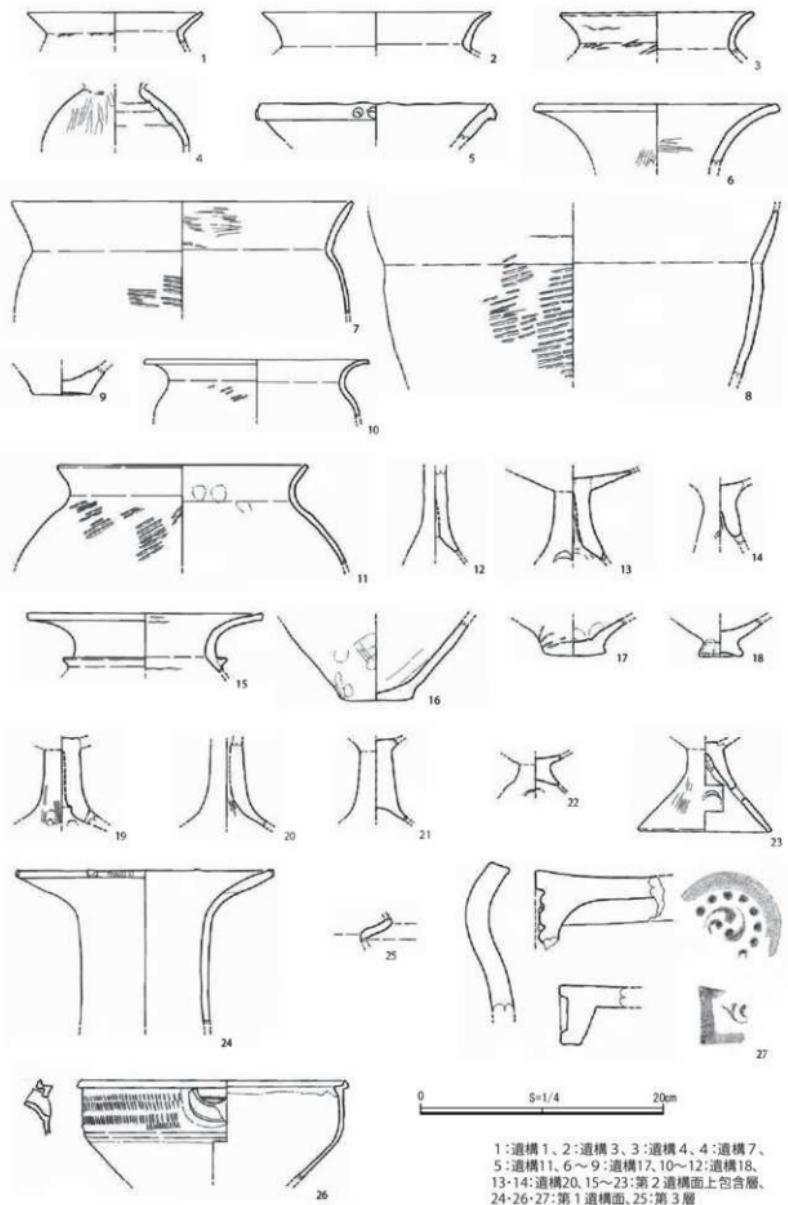


图 37 出土遗物

12は、高坏脚部である。遺構18から出土した。脚柱部は中空である。裾部には円形透孔の方向は3方向である。外面は摩滅が激しい。

13は、高坏である。遺構20から出土した。脚柱部は中空である。裾部の円形透孔が3方向にあけられている。外面の調整はヘラミガキであり、内面にはナデ及びシボリ痕が確認できる。

14は、高坏脚部である。遺構20から出土した。脚柱部は中空である。裾部には円形透孔が4方向にあけられている。外面の調整はヘラミガキであり、内面にはシボリ痕がみられる。

15は、広口壺の頸部から口縁部にかけての破片である。包含層から出土した。口径は19.2cmを測る。口縁部は強く外反し、端部は面をもつ。頸部には、断面三角形の突帯が貼り付けられている。

16は、壺の底部である。第2遺構面上から出土した。底径は6.0cmである。外面にはユビオサエ、ハケがみられ、内面はナデ調整である。

17は、甕の底部である。第2遺構面上から出土した。底径は5.0cmである。外面には左下がりの平行タタキ、ナデが確認でき、内面にはユビオサエがみられる。

18は、鉢の底部と考えられる。上げ底であり、底径は3.3cmである。底端部は外方につまみ出し、ユビオサエがみられる。内外面は摩滅しており、調整は不鮮明である。

19は、高坏の脚部である。包含層から出土した。脚柱部は中空である。外面調整はヘラミガキであり、裾部の円形透孔は5方向の可能性がある。

20は、高坏脚部である。包含層から出土した。調整は内外面ともに摩滅が激しく、不明である。脚柱部は中空であり、内面の脚柱部と裾部の境界に工具痕が確認できる。

21は、高坏の脚部である。第2遺構面上から出土した。内外面は摩滅が激しく、調整は不明である。脚柱部は中実とみられるが、中空の可能性もある。

22は、高坏である。包含層から出土した。内外面は摩滅しており、調整は不明瞭である。脚柱部は短く、裾部は強く開く。裾部の円形透孔は4方向である。

23は、高坏脚部である。第2遺構面上から出土した。底部の端部まで残存しており、径は10.4cmである。脚柱部から裾部にかけてハの字状に開く。外面にはタテ方向のヘラミガキ、内面にはシボリ痕、ナデがみられる。

24は、長頸壺の頸部から口縁部の破片であり、第1遺構面から出土した。口径は20.4cmである。頸部は円筒状であり、口縁部は強く外反する。口縁端部にはキザミと円形浮文がみられる。

25は、土師器の土釜である。第3層検出中に出土した。口頸部はくの字に屈曲し、口縁端部上方に摘み出す形状である。

26は、施釉陶器の行平鍋である。第1遺構面上から出土した。口径は21.4cmを測る。内面体部は灰釉、内面口縁部から外面体部には鉄釉がみられる。外面体部にはトビガンナが施されている。注ぎ口を持つ。

27は、軒棧瓦で、第1遺構面下層から出土した。長さは10.6cm、幅は12.25cm、高さは6.4cmを測る。軒平部には均整唐草文が確認でき、軒丸部には三巴及び珠文が12個みられる。

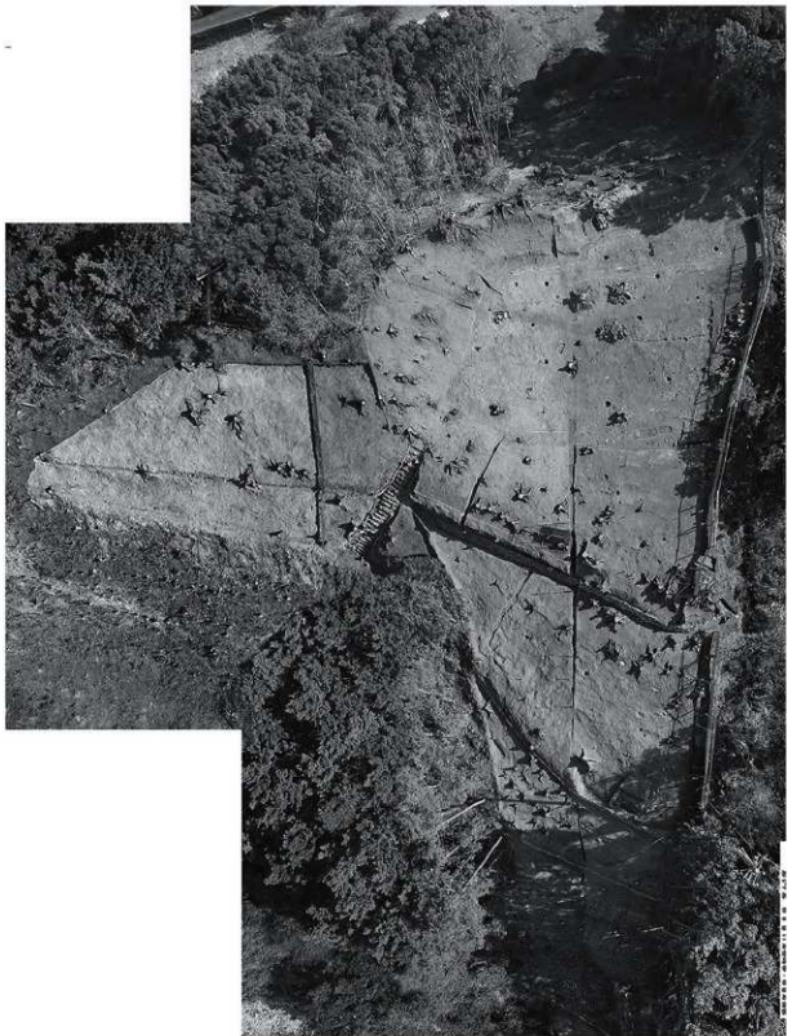
## 第5節 まとめ

以上のとおり、浦屋敷跡の高石垣上面の平坦面において、橋脚部分を対象に発掘調査を実施した結果、近世期及び弥生時代後期の遺構面を検出した。近世期の遺構面は、なだらかに南にさがる丘陵の平坦面及び緩斜面を厚く盛土を行い、高石垣を設けて造成している。第1遺構面からは、大型の礎石が複数見つかり、近世期に浦村の大庄屋をつとめた浦氏の屋敷跡の一部であると考えられる。第2遺構面からは、弥生時代後期の遺構及び遺物が確認でき、高台である丘陵上に人々が生活していたことが明らかとなり、近隣に所在する串本町・笠嶋遺跡などの弥生時代集落との関係性が注目される。

表5 浦屋敷跡出土遺物観察表

組合 番号	種類 番号	地区	遺構 位置	正 面	裏 面	既存 状況	既存 率	目法・調整		色 調	地 土	備 考
								目法	調整			
1	土木上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 1	0.8.0	265+	-	10%	口調子の字に留め 留め部下に下り平行 タリタリ	内側-5Y27/4に低い傾 斜-3N-0.0K	青	泥炭復元	
2	土生上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 3	0.6.7	33+	-	10%	口調子の字に留め 内外皆留め・留めの 字の不明	内側-7S/7-7Hに低い傾 斜-5Y27/6.0K	青	2m以下のチャート ・半地盤化粧等を多 量に含む	
3	土生上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 4	0.5.7	34+	-	10%	底部から口調留めや外反・外曲部留め 15% タリタリタリ	内側-7S/7-7Hに低い傾 斜-5Y27/4に低い傾 斜-7S/7-7Hに低い傾 斜-7S/7-7Hに低い傾 斜	青	1m以下のチャート ・半地盤化粧等を多 量に含む	
4	土生上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 7	-	43+	-	-	体留め 留め部下タリタリ方向 ハラギヨ 内曲部上タリタリ	内-7S/7-7Hに低い傾 斜-7S/7-7Hに低い傾 斜-7S/7-7Hに低い傾 斜-7S/7-7Hに低い傾 斜	青	2m以下の白色 化粧等を多量に含む	
5	土生上部 壁(1個)	北西区	第2遺構面 高石垣 11	0.6.7	32+	-	5%	口調子 底部留め上に留め 外曲部下 ハラギヨ	内-7S/7-7Hに低い傾 斜-5Y27/3浅青緑 外-5Y27/3浅青緑 斜-5N-0.0K	青	やや青 2m以下の チャート・半地盤化粧 等を多量に含む	
6	土生上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 17	0.9.0	51+	-	10%	口調子 底部留め外反 留めは外反に内 15% タリタリタリ	内-5Y28/4に低い傾 斜-5Y27/4に 低い傾 斜-7S/7-7H-1.5K白	青	泥炭復元	
7	土生上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 17	0.7.0	92+	-	10%	口調子 底部留めに留めして右に曲ぐ 底部から口調留めや外反 ハラギヨ	内-7S/7-7Hに低い傾 斜-5Y27/4に低い傾 斜-5Y27/4に低い傾 斜-7S/7-7H-0.5K	青	1m以下の黄色 化粧等を多量に含む	
8	土生上部 壁・大柱粗筋	南西区	第2遺構面 高石垣 17	-	13.0+	-	5%	口調子わずかに外反・口調部に直角に 曲がる 留めひびきや左タリタリの付帯 タリタリ	内-2S/7-7Hに低い傾 斜-7S/7-7H-0.5K白 斜-5N-0.0K白	青	12m以下の白色 化粧等を多量に含む	
9	土生上部 壁	南西区	第2遺構面 高石垣 17	-	22.5+	4.0	-	夜影 外曲部ヨタゲ	内外-7S/7-7H浅青緑 斜-5N-0.0K	青	2m以下の白色 化粧等を多量に含む	
10	土生上部 壁	南西区	第2遺構面 高石垣 18	0.8.2	4.0+	-	10%	底部から口調留めや外反・外曲部留め 15% タリタリタリ 10cmナガ	内-7S/7-7Hに低い傾 斜-7S/7-7H-1.0K白 斜-5N-0.0K白	青	1.5m以下の白色 化粧等を多量に含む	
11	土生上部 壁	北西区	第2遺構面 高石垣 28	0.0.1	825+	-	20%	口調子 底部から口調留めや外反・外曲部留め 20% タリタリタリ	内-7S/7-7Hに低い傾 斜-3-10Y28/3浅青緑 斜-5N-0.0K白	青	4m以下のチャート ・長い白石等を多量に 含む	
12	土生上部 壁	南西区	第2遺構面 高石垣 18	-	7.2+	-	-	脚柱半牛半 底部留め3.3方向 外曲部留め 30% タリタリタリ	内-5Y27/7-7Hに 低い傾 斜-5Y27/7-7H-0.5K白	青	やや青 3mの チャートを多量に含む	
13	土生上部 壁	南西区	第2遺構面 高石垣 20	-	7.5+	-	-	脚柱半牛半 底部留め3.3方向 外曲部留め 50% タリタリタリ	内-5Y27/7-7Hに 低い傾 斜-5Y27/7-7H-0.5K白	青	泥炭復元	
14	土生上部 壁	南西区	第2遺構面 高石垣 20	-	5.3+	-	-	脚柱半牛半 底部留め4.0方向 外曲部留め 40% タリタリタリ	内-7S/7-7H浅青緑 斜-5Y27/6浅青緑 斜-5Y28/4浅青緑	青	1m以下の白色 化粧等を多量に含む	
15	土生上部 壁(1個)	南東区	第1遺構面 高石垣 1	0.9.2	485+	-	10%	口調部外反し、留めは外方に曲 12% タリタリタリ	内-5Y28/6-6.0K 斜-5Y28/6-6.0K白	青	3m以上の灰色 化粧等を多量に含む	
16	土生上部 壁	中央・南西区	第2遺構面 高石垣 1	-	6.0+	6.0	70%	外曲部ヨタゲ... タリタリタリ	内-7S/7-7H-2.0K白 斜-5N-0.0K白	青	1m以下の長石等 ・半地盤化粧等を多量に含む	
17	土生上部 壁	中央・南西区	第2遺構面 高石垣 1	-	31+	5.0	60%	外曲部タリタリの平行タリタリ・ナ タリタリ	内-5Y27/7-7H-0.5K 白	青	5m以上のチャート ・2mの白色化粧等 を多量に含む	
18	土生上部 壁?	南西区・南 西区	第2遺構面 高石垣 1	-	21+	33	90%	底部外方で輪出するユビヨサハ 1.0mナガ 内曲部留め不規則	内外-5Y27/5.0K 斜-7S/7-7H-6.0K白	青	2.5m以下の白色 化粧等を多量に含む	
19	土生上部 壁	南東区	第1遺構面 高石垣 1	-	21+	-	-	脚柱半牛半 底部留め小字 60% タリタリタリ	内-7S/7-7H-4/1に 低い傾 斜-7S/7-7H-4.0K白	青	1m以下のチャート ・長い白石等を多量に 含む	
20	土生上部 壁	北西・南区	扶手帶	-	70.5+	-	-	内外部留め不規 60% 設定 不規 則	内-5Y27/7-7H-4/1に 低い傾 斜-7S/7-7H-4.0K白	青	12m以下の白色 化粧等を多量に含む	
21	土生上部 壁	南東区	第2遺構面 高石垣 1	-	6.7+	-	-	内外部留め不規 60% 設定 不規 則	内-5Y27/7-7H-4/1に 低い傾 斜-7S/7-7H-4.0K白	青	1m以下の白色 化粧等を多量に含む	
22	土生上部 壁	北西・南区	扶手帶	-	32.5+	-	-	内外部留め不規 50% 設定 不規 則	内-5Y27/7-7H-4/1に 低い傾 斜-7S/7-7H-4.0K白	青	2.5m以上の白石等 ・半地盤化粧等を多量に 含む	
23	土生上部 壁	中央・南西区	第2遺構面 高石垣 1	-	7.4+	(30.4)	-	脚柱半牛半 底部留め 30% タリタリタリ	内-5Y27/7-7H-4/1に 低い傾 斜-7S/7-7H-4.0K白	青	1m以下の白色 化粧等を多量に含む	
24	土生上部 壁	南西区	第1遺構面 高石垣 1	0.6.0	12.0+	-	10%	底部内凹 10% ハラギヨ	内-7S/7-7H-4/1に 低い傾 斜-7S/7-7H-4.0K白	青	2.5m以下の白石等 ・半地盤化粧等を多量に 含む	
25	土生上部 壁	南東区	第1遺構面 高石垣 1	-	21+	-	-	口調子の字に留め (1)輪出部上に 輪出部下に	内-7S/7-7H-4/1に 低い傾 斜-5Y27/7-7H-4.0K白 斜-5Y27/7-7H-4.0K白	青	0.5m以下の白色 化粧等を多量に含む	
26	施設周 囲手平鋪	南西区	第1遺構面 高石垣 1	8.3+	-	-	20%	内曲部留め和 内曲部留めから外曲部留め 外曲部留めヨンゼン	内-5Y27/7-7H-4/1に 低い傾 斜-5Y27/7-7H-4.0K白 斜-5Y27/7-7H-4.0K白	青	泥炭復元	
27	軒丸	南東区	第1遺構面 高石垣 1	10.6+	12.25+	6.4+	不明	軒丸留め整修草 丸柱間(△)・底丸12脚	内-5S-0.0K 斜-5M-0.0K	青	1mまでの白石等 を多量に含む 丸入り	





調査区全景（上空から）

写真図版 2

里野中山城跡  
(第1次)



1. 4-2・5区曲輪部  
調査前状況(南から)



2. 4-1区東斜面  
調査前状況(東から)



3. 4-2・5区西斜面  
調査前状況(北東から)

写真図版 3 里野中山城跡（第1次）



1. 曲輪部 完掘状況  
(上空から)



2. 西斜面調査区  
完掘状況(西から)



3. 4-2 区曲輪部  
完掘状況(南西から)



1. 5 区曲輪部  
完掘状況（北西から）



2. 4-1 区東斜面  
完掘状況（東から）



3. 5 区西斜面  
完掘状況（北東から）

写真図版 5  
里野中山城跡（第1次）



1. 4-2区曲輪部  
北土堀（南から）



2. 4-2区曲輪部  
北土堀断面（北西から）



3. 5区曲輪部  
東土堀・502通路状遺構  
(北西から)



1. 5区曲輪部  
東土堀断面(北から)



2. 5区曲輪部  
南土堀と 505 溝  
(東から)



3. 5区曲輪部  
西土堀の基底石  
(北から)

写真図版 7  
里野中山城跡（第1次）

1. 4-2 区曲輪部  
409 土坑櫻検出状況  
(北から)



2. 5 区曲輪部  
501 土坑 (北西から)



3. 5 区曲輪部  
505 溝・小穴群 2





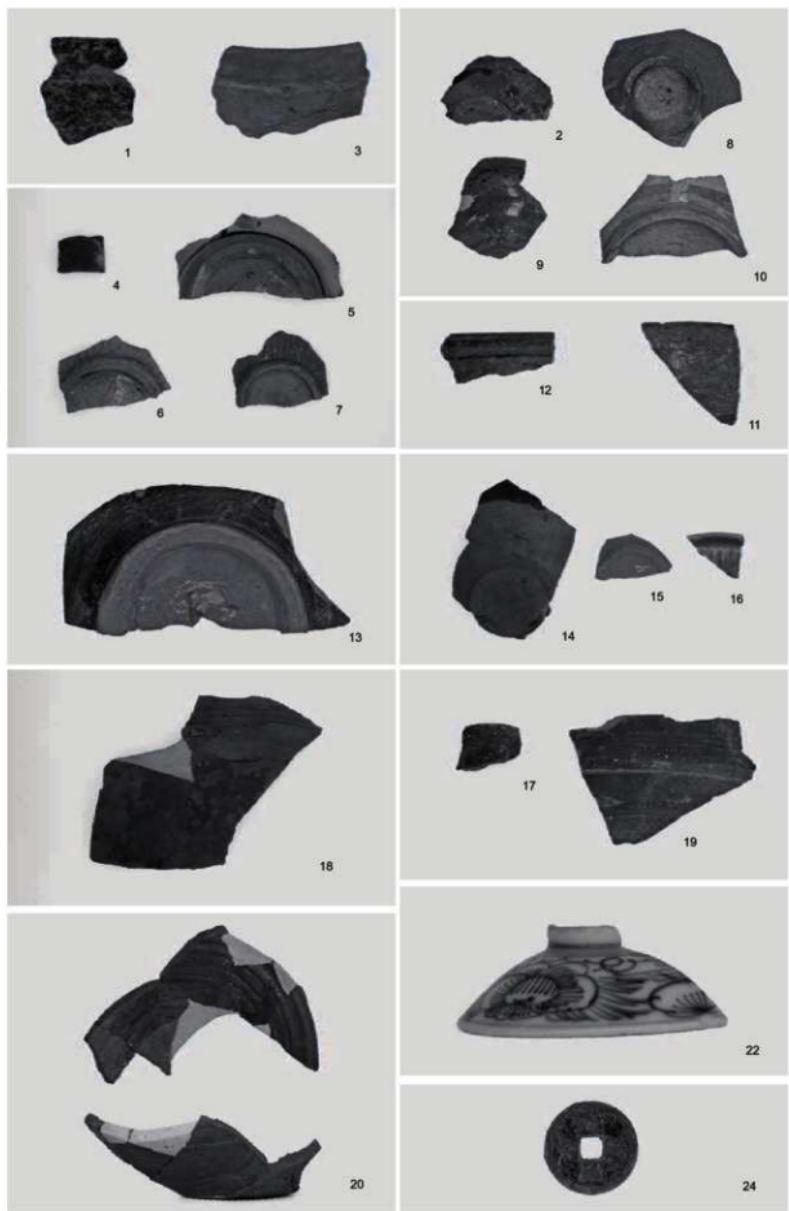
1. 調査前状況  
(南から)



2. 調査区全景  
(南から)



3. 石段・石垣  
(北西から)





1. 結城城跡(南西から)



2. 調査前状況  
(南東から)



3. 1区全景(西から)

1. 1区調査区北壁  
断面（南から）



2. 1区調査区西壁  
断面（東から）



3. 2区全景（西から）





1. 2区 201 井戸  
断面（北から）

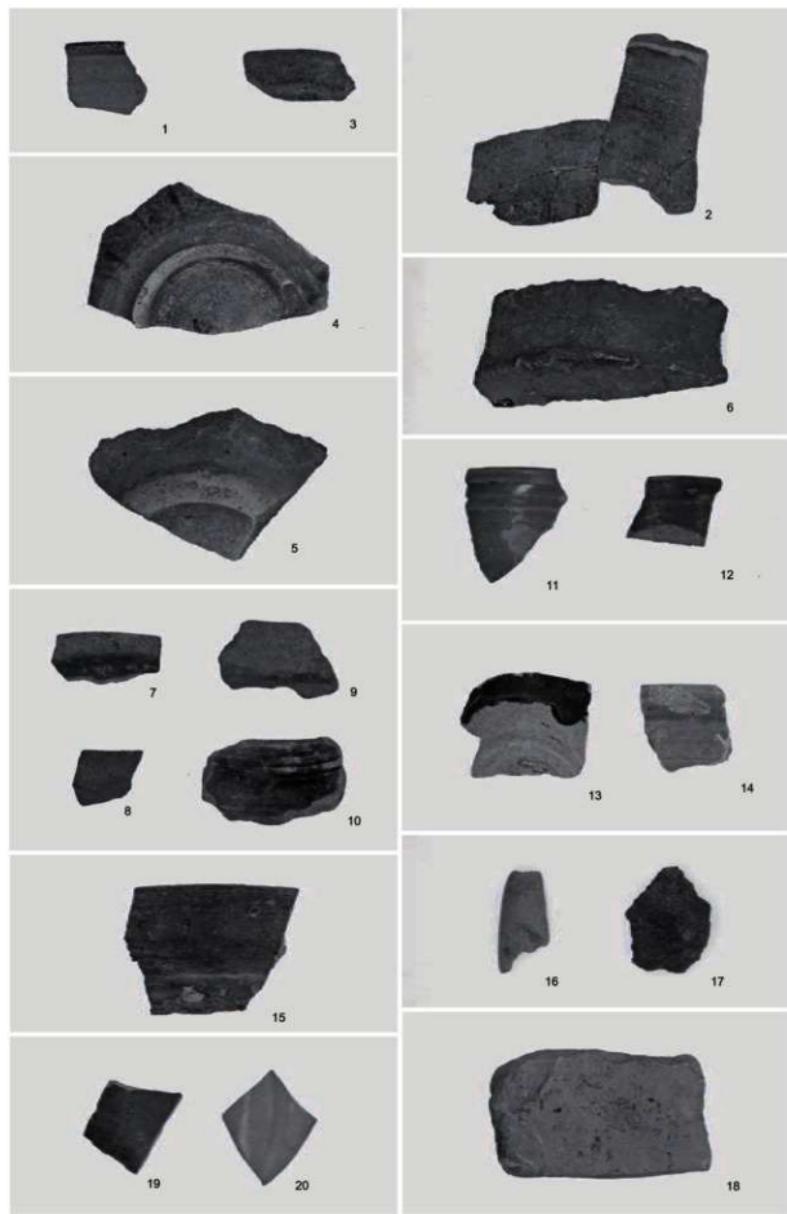


2. 3区全景（西から）



3. 3区 323 柱穴  
土器出土状況（西から）

写真図版 13  
結城城跡（第1次）出土遺物





1. 調査前の状況（南東から）



2. 北区 遺構 7 検出状況（東から）



3. 北区 遺構 17~20 検出状況（西から）



4. 北区 遺構 21~26 検出状況（西から）



5. 北区 遺構 7 完掘状況（南から）



6. 北区 遺構 17~20 完掘状況（南から）



7. 北区 遺構 33 検出状況（北から）



8. 北区 遺構 33 検出状況（東から）



1. 北区 全景（東から）



2. 北区 西壁土層断面（東から）



3. 北区 北壁土層断面（南から）



4. 南区里道部 西側 遺構検出状況（西から）



5. 南区里道部 東側 遺構検出状況（東から）



1. 南区田圃部 遺構検出状況（東から）



2. 南区田圃部 遺構検出状況（南から）



3. 南区田圃部 遺構検出状況（西から）



4. 南区田圃部第1遺構面 掘削状況（東から）



5. 南区田圃部第2遺構面 遺構検出状況（西から）



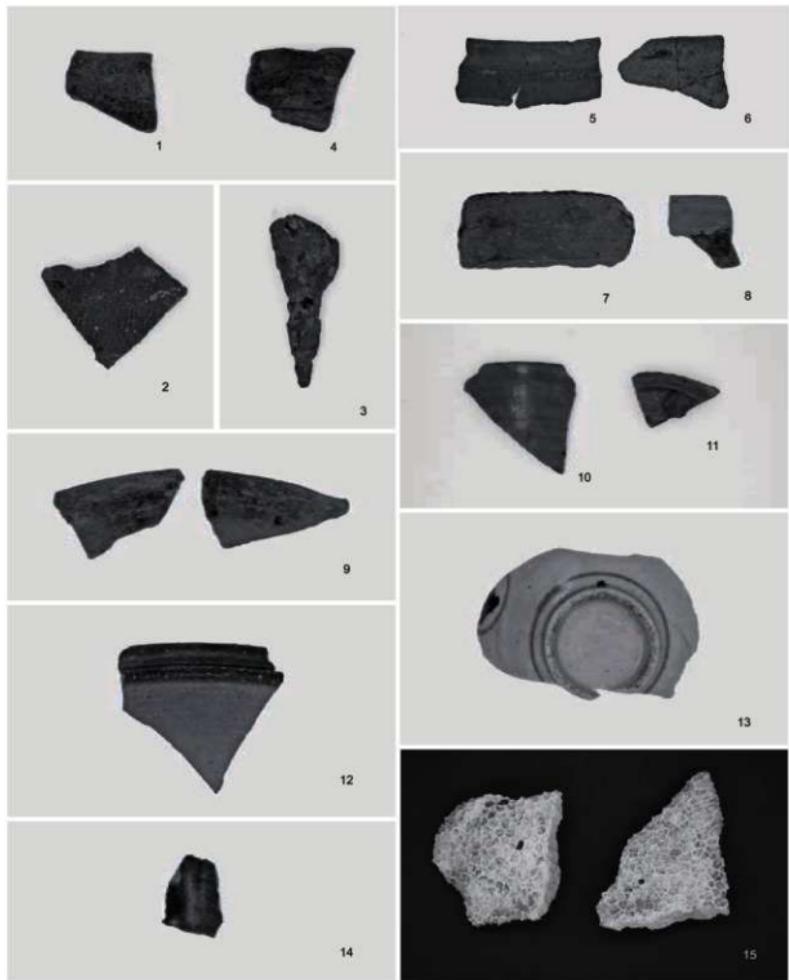
6. 南区田圃部第2遺構面 南壁土層断面(北から)



7. 南区田圃部第2遺構面 完掘状況（東から）



8. 南区田圃部第2遺構面 完掘状況（南から）





1. 堀削前の状況（南東から）



2. 第1遺構面 遺構検出状況（西から）



3. 第1遺構面 遺構 9（南から）



1. 第1遺構面 遺構 9（西から）



2. 第1遺構面 遺構 10（西から）



3. 第1遺構面 遺構 17（東から）



4. 第1遺構面 遺構 16（北東から）



5. 第1遺構面 遺構 11～14半裁断面（南から）



1. 第2遺構面 遺構6・7半裁断面（東から）



2. 第2遺構面 遺構7・8 遺物検出状況(南から)



3. 第2遺構面 遺構11半裁断面（南から）



4. 第2遺構面 遺構13半裁断面（南から）



5. 第2遺構面 遺構14半裁断面（南から）



6. 第2遺構面 遺構15・16半裁断面（南から）



7. 第2遺構面 遺構17・22半裁断面（南から）



8. 第2遺構面 遺構18半裁断面（南から）



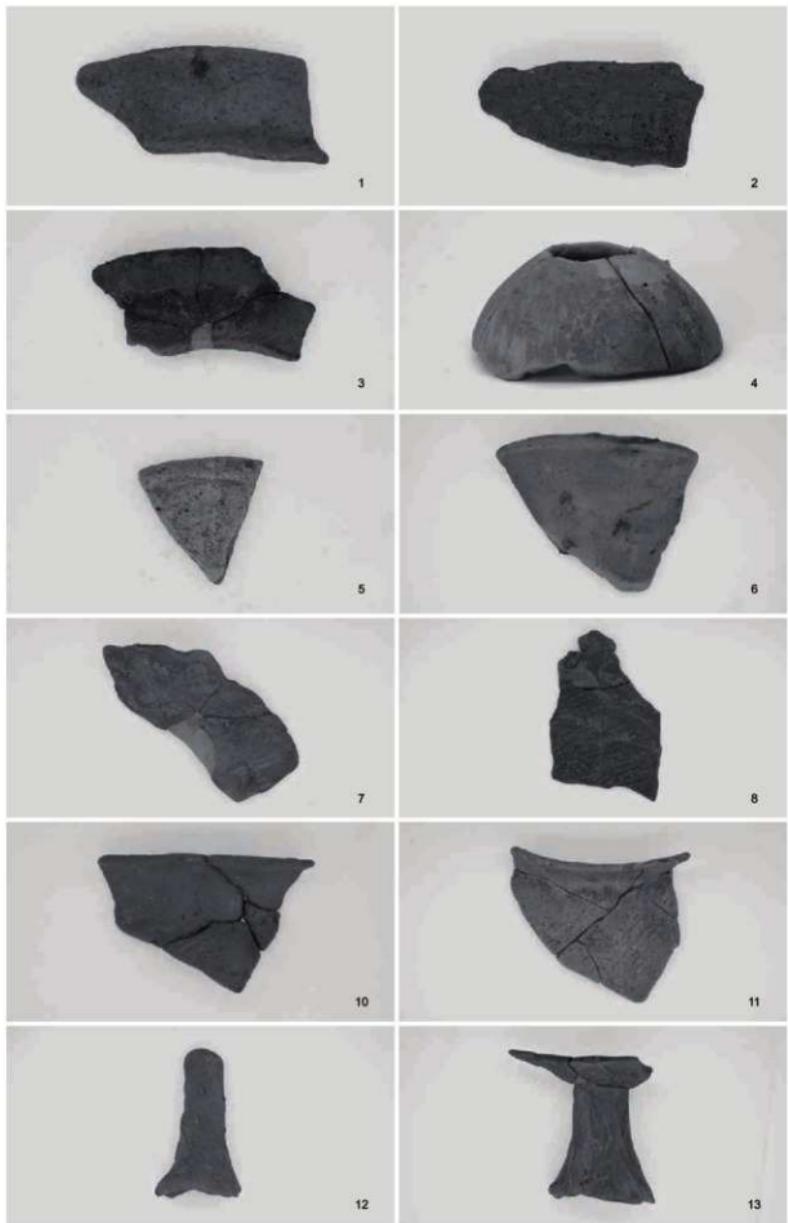
1. 第2遺構面 完掘状況全景（西から）



2. 第2遺構面 北西侧完掘状況及び壁面（南東から）



3. 第2遺構面 南側完掘状況及び壁面（北から）





14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



## 報告書抄録

## 里野中山城跡、結城城跡、浦屋敷跡

—すさみ串本道路建設事業に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2024年2月29日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1

印刷・製本：株式会社 協和

和歌山県海南市南赤坂5-3